
ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

【Nコード】

N3406Z

【作者名】

てんびん座

【あらすじ】

気がつくと、俺はテンプレ通りの真っ白空間にいた。そしてやっぱり神だという人物が現れて、やっぱり転生させてくれるらしい。チート能力はもらえないらしいけど、まあ、楽しむとするか。

第零話（前書き）

他の作品がまだ終わっていないのに書いてしまいました。

第零話

「……どこだ、ここは？」

そこは白かった。視界の端から端まで全てが白く、果てがない。声を出しても反響すらしないことから、とても広い空間であることがわかる。

「俺はどうしてこんな所に……？たしか、近所のコンビニに行つて、それから……」

「死んじまつたんだなあ、うん」

背後から聞こえた声に彼は振り返った。そこには白衣を纏った金髪の博士風な男がいた。ふちなし眼鏡をクイツと押し上げ、気まずそうに彼を見つめている。

「死んだ？俺が？」

「ああ、そうだ。お前は不幸にも工事現場で起こった倒壊に巻き込まれ、全身をミンチにされて死んだ。証拠に写真見るか？」

「……いえ、結構です」

確かに、彼にはうつすらとだが家の近所に工事現場があった記憶があった。おそらく、そこでの事故のことだろう。

「お前、名前は思い出せるか？ いや、前世の記憶は？」

「え、ああ。俺は……」

そこで口がピタリと止まった。自分の名前が全く思い出せなかったのだ。それだけではなく、自分の家族の顔も経歴も、自分の年齢すら思い出せない。所々が虫食いのように穴だらけになっていた。

「やっぱりか。わかつてると思うが俺は神だ。お前は生前、二次創作が好きだったらしいから意味はわかるな？」

「まさか……」

「そうだ。実はな、その事故は本当は起こらないはずだったんだよ。二次創作でテンプレの『書類にコーヒー』のパターンだ。いや、本当にすっかりしていた。マジですまん」

その時、彼はネットで見た展開を思い出していた。チート能力やイケメン、果てにはTSなどやりたい放題の展開になるというものだ。

「え！じゃあ俺死んだのか！？」

全くもって寝耳に水であった。別に彼は自宅警備員でも、学校で孤独な存在だったわけでもない。未練だってまだある。

「マジで悪かったな。侘びとして好きな世界に転生してくれて構わねえ。どこの世界が良い？」

「マジか」

「マジだ」

本当に全てテンプレ通りだった。

「それなら『魔法少女リリカルなのは』の世界にしてくれ」

彼がその世界を選んだのは単純、記憶に残ってるアニメがそれくらいしかなかったからだ。炸裂する砲撃、知覚すらできない高速移動、心躍る近接戦など、頭の中に鮮烈に残っている。

「……………あゝ、あそこか」

神は遠い目をして呟いた。

「まあ、わかった。ただし、転生つてのは本来かなりのイレギュラーよ。だから良く見る二次創作みたいに他作品の能力を付加するのは無理だ」

昔ならいざ知らずな、と神は付け加えた。

「だが、お前にはできるだけ好条件な状態で転生させてやる。これが俺にできる最大限だ」

「……………そうなのか、わかった。色々ありがとうな」

「おう、気にすんな。元々はこっちのミスだ。第二の人生、楽しんでこい」

神がそう言った瞬間、彼の足元に穴が開き彼は声を出す間もなく落ちていったのだった。

「いや、今回はマジで冷や汗もんだったぜ」

被害者の彼が転生していった瞬間、近くの空間が光に包まれ、そこから簡素なパイプ椅子が現れた。神はそれにどっかりと座る。

「はあ、もし俺TUEEEが良いとか抜かす転生者だったら面倒なことになってた。転生できるだけで満足な馬鹿で助かったな」

実際、かなりの好条件で転生できるようには取り計らった。彼の第二の人生は刺激に満ちたものになるだろう。

「いや、それにしても、書類にコーヒーかけたら本当に人が死ぬのかって実験だったけど……。はあ、これはもうやらねえ方が良いな」

そう言っただけで彼はベトベトになった一枚の紙を取り出した。その紙は水気を吸ってベチャベチャになり、文字の一つすら読むことができない。彼が名前を思い出せなかったのもこれが原因だ。しかも、

「まったくアイツら、調子に乗ってかけまくりやがって」

そう、実はかけられたのはコーヒーだけではない。

メロンソーダ、サイダー、コーラ、ケチャップ、マヨネーズ、ウスターソース、タルタルソース、牛乳、豆乳、青汁、スポーツドリンク、ココア、紅茶、ウーロン茶、麦茶、ほうじ茶、オレンジジュース、アップルジュース、ぶどうジュース、マンゴージュース、バナナジュース、カルピス、ヤルトルト、灯油、ガソリン、泥水、砂糖水、食塩水、果てには人間の生き血などを大量に。

「部下が仕事を増やしてどうすんだよ」

その部下たちには、彼を最高に持て成すために同じ世界に転生している。ただの人間一人としてあの世界を盛り上げるためだ。

なぜ神がここまでするのかというと、他の神が好機とばかりにこれを材料にして反抗してくる可能性があったからだ。この神は他の神の中でもかなり嫌われているため、充分にあり得る話だった。ならば、そのことが露見しなければ良い。あの転生者にはせいぜい幸せな人生を送ってもらって、万が一にも他の神に文句を言うことがないようにしなければ。

どうせ神なんて自分の仕事で手一杯だろうから言われない限りはバレないだろうし。

「ま、せいぜい隠蔽に付き合ってくれや、転生者くんよ」

そう呟き、最高神こと教授は溜め息を吐いた。

第零話（後書き）

勢いで書いてしまったので、更新速度が遅いです。

今回は前作や前々作の主人公たちとは全く関係のない一般人が主人公なので、外道は………ありません、たぶん、きつと、おそらくその予定です。たまには少年漫画みたいなのを書いてみたいなと思って始めました。

もう一作の方が中心なので、更新停止はありません。どうぞご安心を。

第一話

「アスカく〜ん、起きてください〜」

心地の良い声が、彼を眠りの底から引き上げようとしていた。しかし、その声はまるで子守唄のように彼の脳内に木霊し、彼をさらなる眠りの世界へと誘う。

「アスカく〜ん、起きないと幼稚園のバスが来てしまいますよ〜？」

美声が再び声を発し、さらにユサユサと彼を揺すって起床を促そうとしてきたが、それは逆効果だった。半覚醒だった彼の脳はほとんど機能を停止していき、

「必殺のフライングボディプレス」

絶対零度の宣言とともに完全覚醒した。

「じゅっふー！」

「抉りこむように、打つべし打つべし打つべし」

さらに声の人物は彼——アスカ「イクシオンの胴に跨り、レバーを執拗に攻撃してくる。ボクサーかお前は。

「起きろ、さもないとコロスゾ」

「げホッ、はいっ！起きました！！」

必殺の連続攻撃に、流石のアスカも目を覚ました。寝巻きの胸倉を掴まれた彼の目に涙が溢れているのは、寝起きだからではないだろう。

そして、彼を起こした張本人はコロリと態度を元に戻し、

「おはようございます、アスカくん」

何事もなかったかのように手を放した。

彼、アスカ・イクシオンは転生者である。両親は出張などで家を空けることが多いため、隣の家であるここ、北条家に居候しているのだった。そしてこのボクサーもどき——北条ほつじょう瑠奈るなはこの家の一人息子である。しかし、その容姿はとても男であるということを信じられるものではなく、実に少女らしかった。

まず、髪が長い。腰に届くほどはある。そしてその髪は銀髪で、顔は色白、瞳は蒼穹のように透き通った青色と、全く日本人らしくなかった。彼の曾祖母が北欧系らしいので、その影響らしい。

「ほらほら、ボサツとしてないで朝ごはんにしましょう。今日はアスカくんが好きな和食ですよ」

そう言っ瑠奈はルンルンと部屋から出て行くとし、

「二度寝したらコブラツイストな？」

そう言い残していった。目が本気だった。

「……やれやれだな」

アスカは溜め息を吐き、幼稚園の制服に着替え始めた。時刻は七時、これから朝食を食べれば十分に間に合う時間だろう。そして彼は壁に掛かっている鏡で軽く身だしなみを整えた。母親譲りの日本人風な黒髪黒目と、西欧系の父親譲りのそこそこ整った顔立ちが映る。

「黙っていればイケメン、か？」

自分がイケメンの部類に入るのかどうかを推察しながら、アスカは一階のリビングへと降りていった。

そこには、朝のニュースを見ながら二人分の朝食を用意している瑠奈がいた。彼の両親は朝早くに出勤してしまうため、自然と朝食はアスカと二人きりになるのである。

「それでは、いただきます」

「いただきます」

そして、アスカは瑠奈がつくった朝食にありつくのだった。

＋　　＋　　＋

「アスカくんって大人びていますよね」

幼稚園に向かうバスの中、瑠奈が突然そんなことを言い出した。

「そうか？瑠奈の方が大人びてるだろ。料理できるし」

「そんなことないですよ」

実際のところ、二人は周囲の中では大人びていた。

アス力は転生者である。生前は何歳だったのかは既に記憶にないが、それでも彼は幼稚園児と比べれば充分に大人だ。それと同等の瑠奈の方が、アス力には不思議であつた。

「黙っていれば可愛い幼馴染で通るんだけどな」

「私は黙っていなくても可愛いと評判ですよ。もう女の子みたいな顔だとからかわれるのには慣れました」

アス力が瑠奈と出合ったのには、それが大きく関係している。

去年の冬、彼は同じ幼稚園で虐められている瑠奈を見つけたのだ。当初は関わる気など微塵もなく、「子供って残酷だな」くらいにしか思っていなかった。しかし、ある日を境に虐めはパタリとなくなった。その理由を、アス力は目撃してしまったのだ。

「いやいや、その報復に年上の奴までボコボコにするような奴は可愛いとは言えないだろ」

そう、ボコボコにしたのだ。

二度と逆らう気が起きないよう、サンドバックのように年上の園児を殴り、仲間を引き連れて戻ってくれば仲間ごとサンドバックにした。それを続けた結果、瑠奈は幼稚園のガキ大将を超えた霸王となっている。しかも、先生には露見しないように細工すら行っていたのだ。

「相手を選ばないから悪いですよ。ほら、人は見かけによらないと言いますし」

「お前が言つと説得力あるな」

事実、園児の中で瑠奈を軽んじている者はもういない。瑠奈が万引きしろと言えば、おそらく園児は泣く泣く万引きするだろう。それほどに瑠奈の影響力は絶大だった。

＋　　　＋　　　＋

幼稚園の卒園は、アスカが思っていた以上に早かった。瑠奈と出会って数年、ここが『魔法少女リリカルなのは』の世界であることを忘れかけてしまうほどに。実際問題、アスカは転生の際に記憶のほとんどが塗りつぶされていたため、原作の知識は殆どが抜け落ちていた。

「あゝ、なんか幼稚園時代の内にやっとかなきやいけなかったことがあった気がする」

「急にどうしたのですか？」

「いやさ、誰かに会わないといけなかった気がするんだよな。誰だろう？」

「……そうですか？」

その言葉をアスカが呟いたのは、二人が私立聖翔大付属小学校の入学する日だった。

いつものように殺人技（今日はジャイアントスイングだった）で目を覚ましたアスカは、別に小学校に入学するのが初めてという訳でもないため、たいして緊張はしていなかった。ただ、この学校の名前を聞いた瞬間、何か引っかけりのようなものを思い出したのだ。

「まあ、別に良いか」

「ですね」

そして同じクラスとなった二人は教室に移動し、それぞれの席に着いた。並び方は五十音順だったため、二人の席の間には若干の開きがあった。チラリと瑠奈の方を見ると、こちらの視線に気づき、軽く手を振ってくる。

その時、担任教師と思われる女性が入室してきた。そして入学を祝う言葉を述べた後、生徒同士での自己紹介をすることになった。アス力は苗字の関係で出席番号が一番。よって、最初に自己紹介をすることになった。

「あゝ、アスカ♡イクシオンです。名前が外人みたいなのは父親が外国人だからで、向こうの言葉は話せません。趣味はゲームで好きな食べ物は何食全般です。よろしくお願いします」

そして一礼。教室に拍手が響き渡った。

その後はアスカの自己紹介を参考にしたような自己紹介が続き、そして、

「はい、良くなりました。それでは次の人」

「は、はい!」

その声は、どこかで聞いたことがある気がして、

「た、高町なのはです! よ、よろしく願いします!」

その栗色のツインテールと鳶色の瞳はどこかで見たことがある気がして、

「高町、なのは？」

思わずアスカはその名前を呟いた。
その後にあつた瑠奈の自己紹介は耳に入らなかった。

第二話

『それでは、次のニュースです。全国で頻発している児童誘拐事件の――』

「最近は何騒ですね」

茶碗を片手に、瑠奈は呟いた。余った方の手は、肩にかかるほどの短さになった銀髪を弄っている。流石に男子であの髪の長さは校則違反だったため散髪したらしい。両親は大反対だったらしいが。対するアスカはそれに応えず、ジッと考え続けていた。

同じクラスの高町なのはについてである。

入学してからの彼女の印象は、とても大人しいものである。特定の誰かと仲が良いという様子もなく、やや人見知りといった感じのする、どこのクラスにも一人はいそうな、極めて普通の少女だった。唯一目立ったことがあるとすれば、最近になってクラスの女子二人と仲良くなり始めたことくらいだろうか？

そんな彼女に、なぜ自分は目を引かれたのだろうか？

「アスカくん？大丈夫ですか？」

「――ッ、ああ、悪い、何だっけ？」

「しっかりしてください。ここところ、誘拐事件が多いので気をつけてください」

「応、わかった。気をつける」

「……大丈夫ですかね？」

そう言いながら、瑠奈は食器を片付けに流し台へと歩いていった。そんなことよりも、アス力にとっては『高町なのは』の方が重要であつた。

アス力が卒園した幼稚園に、あんな少女はいなかった。かといってそれ以前に会つたという記憶もない。会つたこともないのに気になる理由となると、アス力が思いつくことはそう多くなかつた。

「これは、原作に関わることなのか……」

『原作』、それはアス力が転生したこの世界で起こる未来と言っても良い。この世界がどういった世界だったかは、その詳細までは覚えてはいなかつたが、彼女の周囲で事件が起こることは間違いなかつた。それも、アス力の僅かな記憶によれば、それはそう遠くない。

「俺は、どうするべきだ」

わざわざ転生までしたのだ、物語には当然関わりたい。神が言うには、自分はかなり恵まれた状態で転生しているらしいし、魔力だつてあるのだろう。ならば、活躍できる可能性は充分にある。

「よし、とりあえずは原作に関わる高町と仲良くなっておこう。そうすれば便利だろうし」

それに彼女の容姿はなかなか好みだ。物語でもヒロイン級だつたのだろう。それならば、彼女と仲を良くしておいて悪いことなど一

つもない。運が良ければ、前世で夢見たハーレムの実現だってできるかもしれない。

当面の方針が決まったアス力は、鼻歌を歌いながら夕食を続けた。心なしか、普段の夕飯よりも数倍美味しかった気がした。実際、それはアス力の気のせいなのだが、それはそれで良かったのかもしれない。

これが北条家で食べる最後の食事だったのだから。

十　十　十

「瑠奈、これからコンビニ行くけど、何か買ってくる物あるか？」

「いいえ、ありません。というか、もう暗いですから明日にした方が」

「大丈夫大丈夫」

手をヒラヒラと振りながらアス力は家を出た。まだ春先なため、夜は少し肌寒い。そんな中、アス力は切れた炭酸飲料を買ったために一人コンビニへと足を向けていた。日が沈んだからか周囲には人の姿が見当たらず、住宅街はシンと静まりかえっている。

「こりゃ、絶好の誘拐日和だろ」

一人冗談を呟きながら、アス力は黙々と歩を進めた。この辺りでは誘拐事件は起こっていない。事件は全国各地で起こっているが、治安の良い海鳴だからこそ、まだ事件は起こっていないかった。そして、これからも起こると思っていなかったのだ。

だからこそ、アスカも油断したのかもしれない。

突然の衝撃。

「——があッ!？」

どこかに凄まじい威力の打撃を叩き込まれ、アスカはコンクリートの地面に倒れ伏した。
意識が混濁し、なぜ自分が地面に倒れているのかわからない。周囲で誰かが何かを話しているのが聞こえたが、エコーがかかっているかのようにはっきりと聞こえない。

「…………お……だ……にも見ら……て……い……?」

「だい……ぶだ、けっ……いを張……ている」

コイツらは何を言っているんだ?何がどうなっている?そもそも、コイツらは誰だ?

様々なことが頭に浮かび、そして消えてゆく。そして段々と視界が暗くなっていき——

その日、アスカが家に戻ってくることはなかった。

十　　十　　十

アスカが意識を失った時、彼は近くの屋根の上からその一部始終を

観察していた。

コンビ二へと向かうアスカに、背後から二人の男が迫って首筋に当て身を叩き込んだのだ。相当な威力だったらしく、アスカは一撃で昏倒してしまった。

「あゝあ、だから気をつけてって言ったのに」

そう、誰にともなく呟いたその言葉に、

『どうなさりますか？保護されるのならば今しかありませんが』

彼がいつも首から提^さげている、白いペンダントが応えた。

「いえいえ、これは私——北条 瑠奈の管轄外です」

そう言つてアスカが黒塗りの乗用車に運び込まれる様子を、瑠奈——いや、ルナは見つめていた。彼がその気になれば、誘拐はおろか襲撃すら未然に防げたはずなのである。

それに、とルナは付け加えた。

「これは彼の試練です。教授が仰っていた『人生の好条件』というものは、何も家柄や才能のことだけではありません」

『と、言いますと？』

「人生山あり谷あり、波乱万丈、つまりは『主人公』のような人生のことなのですよ」

人間、上手くいき過ぎれば必ず飽きが来るものだ。教授はそれを回

避するために、原作に関わらなくとも事件が続くように幸運のパラメーターを設定した。その結果が『これ』だ。

「教授曰く、『文字通り必死に生きてこそ、人生のありがたみがわかる』だそうです。つまり、これは彼が死ぬ気で頑張れば何とかなる試練なのですよ」

『そういうもののですか』

「です」

少なくとも、ルナはそう聞いている。アスカが人生を諦め、ここで死ぬ可能性もある。その時は、心が折れる前に改めて自分たちの内の誰かが救いの手を差し伸べれば良い。そうすれば彼は再び立ち上がり、鮮烈で充実した人生を歩んでゆけるだろう。

「さてと、それじゃあ私たちは帰りますか」。見たい番組がもうすぐ始まってしまいます」

そう言つてルナ——いや、瑠奈は無人の路地に降り立ち、帰路に就いたのだった。

その場に漂う、誘拐犯二人が張った人払いの結界の魔力の残滓を残して。

第三話

目が覚めると同時に、まどろむこともなくアス力は覚醒した。そのまま寢床から起き上がり、配給されている訓練服に着替える。これらの動作は手馴れた様子があり、いつそ機械的と言っても良い。それもそのはず、アス力がここに連れてこられてから既に一年の月日が経っていた。

一年前のあの晩、アス力を誘拐した二人は次元犯罪者だったのだ。彼らは管理外世界に住む魔力資質を持った子供を誘拐し、その子たちを戦闘魔導師へと育成して将来の戦力として使うという計画のテロ組織だった。子供たちの年齢や性別はバラバラで、十代の中盤のような少年もいればアス力よりも年下にしか見えない少女もいる。どうやら誘拐された子供はアス力で最後だったらしいが……。

起床して食堂へと移動したアス力は、そこで配給されたパンを黙々と食べた。周囲の子供たちも同じようにしており、そこに会話は存在しない。当然だ。彼らは稀に実戦訓練という名目の『殺し合い』をさせられる。それが数回行われてから子供たちの表情は死んだようになった。周囲の人間が、いつ敵になるのかと思うと、他人と関わる余裕など欠片もなかったのだ。

「朝食の時間は残り十分だ！早くしろ！！」

アス力たちが誘拐され、この施設にぶち込まれてから一年間お世話になっている教官の怒号が飛んだ。それに反応して、アス力たちの食べる動作が些か忙しくなる。

——クソ不味い。

自然とそう思った。別にパンに罪があるわけではない。ただ、瑠奈がつくってくれた食事を食べて学校に行くということがどれだけ大切なことだったのかを、アス力は思い知っていた。転生者で、神が味方になっでいて、あまりにも平穩が続いていたからか、生きることがどれだけ大切なことを忘れていた。

＋　　　＋　　　＋

訓練は基本、騎士と魔導師の二グループに分かれて行われる。グループ分けの基準は適正であり、そこに子供たちの意思は存在しない。幸か不幸か近距離適正も射撃適正もあり、魔力にも恵まれていたアス力はその中でも最強になっており、専用のデバイスも与えられていた。もちろん、それは教官たちの指示がなければ展開できず、教官たちには魔法を発動させることもできない。デバイスを管理するAIが自動で制御してしまうためだ。

「こんな時は不便なモンだな、インテリジェントデバイスってのも」
訓練が始まり、アス力は魔導師グループでの訓練に参加していた。両方に適正のあるアス力は、二つのグループに交互に参加させられているのだ。

直射弾の訓練、誘導弾の訓練、他にも砲撃や収束技能、空戦軌道、魔力制御など、魔導師グループにもやることは多い。これが騎士グループだと徹底的に得物の扱い方を教え、その後に装甲の強化訓練デバイスなどがある。対人戦に特化させるためだ。

今日も一通りの訓練を消化し、最後はクールダウンをして終わるはずだった。

そつ、普段だったら。

「本日はこれより、『実戦訓練』を行う！」

教官の一声により、子供たちの中に動揺の空気が伝播した。話し声すら聞こえないものの、その表情にはありありと恐怖の顔が浮かんでいる。

この『じゆんせん実戦訓練』は、訓練場の中央に数人が呼ばれ、そこでその数人が配給されたデバイスを使って戦闘をするというものだ。子供たちへの見せしめという意味合いもあるため、その戦闘は殺傷設定で行わる。そして決闘の形式で行われるそれは、相手が死ぬまで終わらない。

——頼む、俺を当てないでくれ……！

祈るような気持ちでアスカは願った。

通常、アスカのように専用デバイスを配給されている者が選ばれることは殆どない。専用機持ちとそれ以外では格が違いすぎるからだ。そして、専用機持ち同士がこの訓練を行うこともない。このようなことで貴重な人材を失うことも馬鹿らしいからだ。

それでも、アスカは願わずにはいらなかった。専用機持ちではなかった頃、アスカは二人の子供を殺している。ここの洗脳じみた教育のせいで殺しには微塵も躊躇うことはないが、それでも気持ちの良いものではない。まして、前世を含めて二十数年の時を生きているアスカには辛すぎた。

「これから呼ばれた者は前に出るオ！008番、027番、069番——」

誘拐された子供の合計は152人。そして、それらの子供たちは番

号名で呼ばれていた。

もっとも、152という数字は一年前の話であり、現在は144人に減っていたが。

「071番、131番——」

そして、

「最後に152番！」

最後に呼ばれたのは、最後に施設にやってきたアスカの番号だった。

＋　　＋　　＋

呆然としながらも、身体は勝手に指示通りに訓練場の中央に並んでいた。今回呼ばれたのは六人。つまり三組だ。そして、デバイス持ちはアスカだけだった。つまり、これは相手を一方的に殺せという意味である。

——何なんだよ、これはッ……！

待機状態のデバイスを握り締め、歯を食いしばる。既に敵の少年は配置に着き、簡易型ストレージデバイスを展開していた。自分と同年代であるうその少年の目は、専用機持ちを相手にすることの無意味さを悟った諦観に満ちていた。それでも、戦うのをやめるわけにはいかない。それが命令だから。

「チクショウッ!!」

『Standby, ready, setup』

女性型の電子音を響かせ、アスカもデバイスを展開した。

アスカの魔力光である銀色の光を放ち、フレームを展開、そして完了。その姿は槍のように先端が尖った杖で、銀色の穂先近くの柄の部分には回転式弾倉^{リボルバー}が備え付けられていた。CVK-792――ベルカ式カートリッジシステムである。

槍であり、同時に杖でもある。これがアスカが支給されたデバイス『ベルセルク』だった。

バリアジャケットのデザインはシンプルで、漆黒のジャケットにレザーパンツ、それに同色の箆手にブーツという黒尽くめの格好である。機能性を重視した結果であった。

展開を終えたアスカはデバイスを構え、戦闘態勢に入った。その目は、後悔と罪悪感に溢れている。

「それでは……………始めッ!!」

十　十　十

号令と同時にアスカはスフィアを形成、発射した。

「クロスファイア、シュート!」

銀色の軌跡を描き、五発の誘導弾が少年に殺到する。少年は咄嗟に障壁を展開し、誘導弾を防ぎ切る。

しかし、その時点で勝負は決まっていた。

「デバイス――」

アスカが使うのは典型的なミッドチルダ式の魔法が多い。誘導弾で攻め、その隙を持ち前の魔力を用いた砲撃で蹂躪する。バリア強度が高かったことも、この施設で最強となった所以だ。故に、

「——バスター！」

牽制の誘導弾を防ぎきった時には、既に砲撃の準備は終わっていた。銀色の濁流に、為す術もなく少年は飲み込まれる。張られた障壁は一秒すらも耐え切ることはできず、一瞬で貫かれた。加えて、この訓練は殺傷設定で行われている。アスカが放った砲撃はバリアジャケットを突き破り、少年の身体を焼き尽くした。

「そこまで！」

教官の声がかかり、戦闘訓練は終了。

他の組はまだ続けていたが、終わるのを見届けることはできなかった。

「152番、良くやった！もう自室に戻って良いぞ」

「……ありがとうございます」

デバイスプレスレットを待機状態に戻し、アスカはその場を足早に立ち去った。他の子供たちの恐怖と憎悪の視線を背中に受けながら。もっとも、明日にはその感情も死んでいるのだろうか。

第四話

突然だが、襲撃をかける際に最も有効な時間帯を知っているだろうか？通常は夜の闇に紛れた夜襲が効果的と思われるが、それは暗殺などの場合だ。ただ単に襲撃をするだけならば、明け方が良いと言われる。

それは、何の前触れもなく始まった。

突然の揺れ、そして爆発音が施設に響き渡り、内部に警報が鳴り響いたのが始まりであった。

「な、何だ！？」

それに反応し、アスカの意識は覚醒した。しかし時間が時間であるため、本調子とは言えない。半分寝ぼけた頭で状況を確認しようと、ベルセルクを手にとった。

「おい、何が起きてる？」

『不明です。私には何も知らされて……いえ、たった今連絡が来ました。何者かの襲撃を受けたため、専用機持ちは全員迎撃に当たるようにということです。フルドライブも許可されております』

「はっ！随分と焦ってるようだな、教官どもは。それで相手は？とうとう局に嗅ぎつけられたか？」

アスカとしては万々歳だった。それならば適当に相手をして捕まれば良いだけのこと。

今頃、教官連中はデータの削除などで大忙しだろう。自分たちに構っている暇はないはずだ。

『敵の正体は不明です。……ただ、一つ問題が』

「あん？」

『敵は、一人です。それも、抵抗した者は全員が殺害されています』

「なッ！？」

ありえない。局員ならば隊を組んでくるだろう。それに、殺害という行為をそんなに易々で行うはずがない。

『マスター、早急に移動を。現在、施設の訓練スペースは全壊。その他の施設も破壊を継続しながら敵は侵攻してきます』

「……………」

もう言葉も出ない。この施設には防衛システムとして多数の傀儡兵や機械兵器が配置されている。それらを蹴散らして侵攻するなど、アスカには到底できない。

「チクシヨウ！何が目的なんだよ！こんなトコに来たって何もねえだろうが！」

そう言いながらもアスカは走り出した。敵がいる場所はリアルタイムでベルセルクに送られてきている。先回りは容易い。

走ること一分半、アスカは目的地へと辿り着いた。迎撃のためか照

明は落とされ、通路には僅かに覗いた朝日しか光はない。

通路の陰に隠れたアス力は、襲撃者が通過するのを待った。既にデバイスは展開している。先ほどから戦闘の音が続いているため、おそらく他の専用機持ちは正面から迎撃に当たっているのだろう。アス力にはそんな気は毛頭ない。どんなに魔力があろうと、最も確実に倒す方法を選ぶべきだと思っているからだ。

すると、不意に戦闘音が止まった。

———「やったのか!？」

「おい、どうなった?他の連中が仕留めたのか?」

『状況確認中……把握。マスター、どうやらマスター以外の専用機持ちは全滅したようです。バイタルが確認できません』

全滅。

アス力は眩暈がした。専用機持ちは最低でもAランク相当の実力者しかない。そして、アス力を除けば八人もいる。それを一人で片付けたのだ。尋常な相手ではない。奇襲を選んで正解であった。

専用機たちは全てがインテリジェントデバイスで、持ち主のデータを頻繁に教官たちに報告する役目がある。そして、非常時には連携が取りやすいように互いの情報をリンクさせることが可能なのだ。そのデバイスが言うのだ。間違いなく全滅したのだろう。

その時、ガツリと瓦礫を踏みしめる音が通路に響いた。

「———ッ!」

動揺を押さえ込み、通路の脇にしゃがみこむ。そしてそのまま腹這いになり、切っ先を襲撃者が来ると思われる向けた。

【襲撃者が通路に現れた瞬間に攻撃する。誘導弾で牽制、その後に砲撃でノックダウンだ】

最後に人を殺してから一年、合計二年間共に戦ってきた愛機はチ力チ力とコアを瞬かせることで答えた。

術式を構成、スフィアを展開、準備は整った。あとは襲撃者が30メートル離れた曲がり角から出てくれば全て終わる。

そして、

通路の角から、

靴の先が僅かに見えた。

『Cross Fire』

「シュート！」

刹那、銀色の魔弾が暁を駆け抜けた。その数は五発。

発射と同時に砲撃のチャージを開始する。これがアスカの必勝戦法。通路の陰に隠れようと、壁ごと貫ける。防御魔法を張ろうと防御ごと削りきる。そのような自信がアスカにはあった。

うる覚えの原作から引き出した、アスカの戦術である。

しかし、敵の次元はアスカの常識を打ち砕く。

「ウゼエ」

『Spread Bullet』

それは、一発の弾丸だった。しかし、ただの弾丸ではなかった。

銃口から放たれたそれは一瞬で拡散し、通路を緋色に染め上げる。さらに拡散した弾丸には若干ながらも誘導性能があるらしく、緩やかに曲がりながら通路の奥、つまりアスカのいる場所にばら撒かれた。

「なッ!？」

誘導弾は全てその奔流に飲み込まれ、砲撃は撃つ前にこちらが撃たれる。完全に出鼻を挫かれた。

『Round Shield』

咄嗟に身を縮ませ、シールドするのに必要な面積を最小限に減らす。その分、シールドの密度を上げる技法だ。

そして弾幕がアスカに迫り、

轟音が響き、シールドが軋んだ。

だが、それだけだ。シールドはその役目を見事に果たし、アスカの身を守りきった。

「へえ、防いだかよお」

アスカの鼓膜を、賞賛の声と拍手が震わせる。

「いやあ、マジで死んだと思ったんだけどなあ？おいおい、このクソ誘拐集団も中々良い教育してんじゃねえかあ」

それは少年だった。容姿からして、アスカと年代はそう変わらないだろう。

烏のような漆黒の髪。射殺さんとはかりの鋭い目つき。嘲笑を浮かべながら、黄金のように金色の瞳をこちらに向けている。

「で？テメエがラストかあ？」

ギラギラと目を輝かせながら少年が問うた。

「……あ」

勝てない。

アスカは一瞬で悟った。気迫が、一つ一つの動作が、殺意が、違いくすぎる。

ここまで勝利のビジョンが浮かばない敵は始めてだった。教官相手の模擬戦でも、状況と作戦しだいで勝てる自信はあった。

だが、この相手は教官なんかとは格が違う。

足が竦み、蹲った体勢から立ち上がることができない。デバイスを握る手さえも、気を抜けば力が抜けてしまいそうだ。

化け物。自然とその言葉が浮かんた。アスカとそう変わらない歳に

しか見えないのに、全く違う生物を相手にしているとしか思えない。その様子を見て、襲撃者の少年はあからさまにガッカリした表情になった。

銃型デバイスのグリップで頭を搔き、溜め息を吐く。

少年のデバイスは銃身が長く、八発まで入るタイプの大型の回転式^{リボル}弾倉が備え付けられている。フレームは全て黒く塗られた無骨なデザインだ。

「チツ、さっきのはマグレかよお。つまらねえ。専用デバイスがあるからにはそこそこ強えんだろおが、びびってるんじゃないからねえぜ」

ダルそうに肩を落とし、散歩でもするかのように少年はアスカに歩み寄った。
そしてデバイスをアスカの額に押し当て、

「死ね、ザコ」

引き金に手を掛けた。
刹那、

『C r o s s F i r e』

一発の魔力弾が銃身の側面を叩き、アスカの命を救った。

『マスター！退避を！』

「——ッ！」

瞬間、アスカは我に返り、全速力でその場から後退した。狭い通路の中を、飛行魔法と加速魔法を併用して一気に飛び退る。

「はあく、良いデバイス持ってたなあ」

『Spread Bullet』

感心した様子を見せながらも、追撃の手は緩めない。先ほどの弾幕が今度は連続で放たれた。

それは、数という名の暴力だった。通路は隙間なく弾幕で埋め尽くされ、少しでも加速を緩めれば一瞬で蜂の巣だろう。もはや弾丸の壁である。

——このままだと追いつかれる……！

そう判断したアスカは、負担を無視して横に伸びる通路に身を投げ出した。次の瞬間、今しがた通っていた通路を魔力弾の壁が通過する。その数の多さに、思わず冷や汗が出た。

『マスター、無事ですか？』

「……何とかな」

慣性を無視したその軌道に全身が痛みを訴え、胃の中身が逆流しそうになる。それでも、死ぬよりかはマシだった。

「ベルセルク、俺はいつまで時間を稼げば良い？」

もはや撃退することは諦めていた。あの少年に勝つには、自分では役者不足だ。

実力も、ステージも、何もかもが最悪だ。

『はい……およそ、十分間です。それだけあれば全員が脱出できると思われます』

十分。それは長すぎた。

今の攻防、いや、蹂躪でさえたったの42秒。その15倍近くの時間を稼ぐなど不可能だ。

しかも、こうしている間にもあの少年は接近してきている。時間がない。

身体の痛みを無視し、アス力は立ち上がった。とにかくこの場を移動しなければ命はない。

「こうなったら、一か八かだな」

＋　　＋　　＋

「うおおーい、逃げてんじゃねえぞお」

がらんとした通路を、襲撃者の少年——ライア「アーロゲント」は歩いていた。

途中にある部屋を一つ一つ確認し、逃げ遅れた人間がいれば容赦なく眉間に穴を開ける。

しかし、ライアが探しているのは逃げ遅れではなく、先ほど自分から逃げていった少年なのだ。

「アイツ、尻尾巻いて逃げやがったかあ？」

興醒めも良いところであつたが、それならそれで仕事が楽になるので構いはしなかった。

ライアの今日の仕事はあくまで『施設の破壊』であつた。邪魔そうな奴は殺しても構わないと依頼主からの言葉もあつたため、目に付いた人間は皆殺しにしている。

「でもよお、さっきの奴は中々見込みはあると思つたんだがなあ」

『魔力量、戦闘センス、ならびにデバイスの性能も目を見張るものがありましたね』

その言葉に答えるのは、彼が腰のホルダーにしまっている銃『ベロボーグ』であつた。

「まあなあ。だが、アイツは駄目だあ。ここで奇襲でもしてくんないかと思つて追つてみたが、全然だし」

もう待つことも面倒になつたライアは、広域攻撃魔法で地表ごと施設を吹っ飛ばしてやろうか、などと物騒なことを考え始めた。段々と本気でそれを考え始めた頃、突然視界が開け、広い空間に出た。

「ベロボーグ、ここはどこだあ？」

『はい、第二訓練場だと思われます』

「けっ、贅沢だねえ。二つも訓練場があんのかよ」

とりあえず、天井と壁を破壊して次に移ろうとライアがその天井を

見上げると、

莫大な量の銀色の魔力を撒き散らしながら迫るアスカの姿があった。

＋　　＋　　＋

『A・C・S・, s t a n d b y』

「アクセルチャージャー起動！ストライクフレーム、展開！」

穂先に魔力刃『ストライクフレーム』を展開し、さらに二枚の魔力で編まれた翼が展開された。

アスカは現在、第二訓練場の天井付近に陣取り、ライアがやってくるのを待っていた。既に魔力は臨界点まで圧縮されており、防御は不可能なレベルに達している。

「クッソ！原作で主人公がやってたはずだけど、コントロールが難しすぎる！」

『敵の接近を確認、カウントダウンを開始します』

下手すれば、デバイスのフレームごと身体が粉々になりそうなほどの魔力の奔流を制御し、その状態を保つということは容易ではなかった。しかし、あの少年に勝つにはこれしかない。そうアスカは確信していた。

『3』

翼が脈動し、今にも飛び出さんと荒れ狂う。

『2』

ストライクフレームに魔力を限界まで注ぎ込む。

『1』

そして、乾坤一擲の覚悟を決める。

『0』

「エクセリオンバスターA・C・S、ドライブ!!」

『Ignition』

瞬間、アスカは魔力を完全に開放した。

入り口の頭上から、音すら追い越さんばかりの勢いで突進する。

それに気づいたのか、ライアがこちらを見上げた。その顔には驚きの表情がありありと浮かんでいる。

「うお!？」

『Protection Powered』

直撃の瞬間、デバイスがオートガードを発動させ、バリアでもってアスカの必殺の一撃を止めた。
しかし、

「ベルセルク!!」

『Load cartridge』

残りのカートリッジ6発を全て炸裂、バリアをストライクフレームが貫いた。この時点で勝敗は決した。ストライクフレームの先に砲撃のための魔力が集まり、必殺の砲撃が零距离で放たれる。

——— 殺った!!

そう、そのはずだった。

「甘えんだよ!!」

『Barrier Burst』

砲撃が発射される直前にバリアが爆発。二人はそれを諸に食らい、お互いに吹き飛んだ。

「死ねゴラァ!!」

『Rapid Bullet』

しかし、ライアは吹き飛びながらの不安定な体勢で反撃。数発の魔力弾を撃ち込んだ。

「ガァ!?!」

その内の一発をまともに食らったアスカは右肩を貫かれ、壁に叩きつけられた。

一方、ライアは受身を取りながら地面に落下する。

「ヤロオ、マジで死ぬかと思ったぜえ？」

至近距離で爆発を食らったにも関わらず、ライアは余裕の足取りで倒れ伏したアスカに近づいていった。

「……ぐ、クソッ！」

「はいはい、まあお前は頑張ったと思うぜえ？でもさあ、世の中にはどうにもならねえこともあるんだわ」

そして、再びライアはアスカの額に銃口を押し当てた。もう反撃する魔力も体力も残っていない。既に打つ手がなかった。

「んじゃ、まだ朝なんだが Good Night っ」

第五話

「……知らない天井だ」

目が覚めると、アスカは見知らぬ部屋のベッドで横になっていた。白い壁、そして白い天井。部屋には他にもベッドがあり、アスカはようやく自分が病室にいるのだと理解した。

「俺は確か、撃たれたはずだ……」

アスカが覚えている最後の記憶は、額に押し当てられた銃が火を噴いた瞬間だった。

頭を魔力弾が貫いた感覚までハッキリと残っている。間違いない。自分は死んだ。

『お目覚めですか、マスター』

すると、アスカが寝ているベッドの枕元から聞きなれた電子音が響いた。

視線を向けると、そこには肌身離さずに持ち歩いていたブレスレットが鎮座していた。

「ベルセルク……」

『はい』

「……スマン、何がどうなっているんだ？状況がサッパリわからん」

『はい。ここはミッドチルダの総合病院です。施設が襲撃を受けて

から、既に三日が経過しております』

「三日もだと………って痛ッ!!」

驚きの声を上げた瞬間、右肩に激痛が走った。ライアに撃ち抜かれた傷だ。今は包帯が巻かれているが、下手に動かさない方が良くだろう。治癒魔法があるとはいっても、完全回復には程遠い。

「ッテエ〜!」

『ご無理をなさらないください。』

話を続けます。あの施設は全壊、施設内に残っていた人間は全員死亡、その他は全員が管理局に捕まりました。襲撃者の少年は逃走、行方はわかりません』

「管理局だと!?!」

ベルセルクの話を書めると、逃走した施設の教官と子供たちは、『偶然にも』施設に突入しようとしていた管理局員と鉢合わせ。その場で全員が御用となった。しかし、日取りや時間のタイミングが完璧だったことから、偶然というのはあり得ない。

『おそらく、あの襲撃犯と管理局は裏で繋がっていたのでしょう。我々を炙り出すために、あえて罠に使ったのです』

「なるほどな」

それならば説明がつく。向かってきた敵しか殺さず、逃亡を許すように派手に動いていたのはそのためだったのだ。

「でもよ、それだとなんで俺は生きているんだ？」

『それなのですが、例の少年から伝言があります』

「伝言？」

『はい。』見逃すのは一度だけだ。次はもっと強くなっておけ』
『そうです』

「はあ？」

その他に、伝言にはあの少年の名前と数多くの罵倒が伝言され、アス力は思わずゲンナリとしてしまう。

「つまり、俺は敵わなかったってことか」

『はい』

「負けたな」

『はい。それも圧倒的に』

「圧倒的は余計だ」

『申し訳ありません。しかし事実です』

「うっせ。」

……はあ、世界は広いな。あんなガキとかあり得ねえだろ」

『あり得ないということはあり得ません』

「あれ？あのキャラって何て名前だっけ？グラ。ニー？」

『それはあのポツチャリです』

そんな他愛もない話だったが、施設にいた頃よりも遥かに穏やかな時間が流れていった。

＋　　　＋　　　＋

——三日前

ミッドチルダの首都『クラナガン』、そこに襲撃者の少年——ライアはいた。

建物で入り組んだ道を迷うこともなくスイスイと進み、とある一軒のボロアパートの前で足を止める。かと思うと、そのアパートの一室に入ってしまった。

ここはライアが拠点としているアパートである。見た目や強度を度外視し、家賃の安さと風呂付きかどうかだけで選んだ格安物件なのだ。日照り？最寄の駅？そんなものは関係ない。値段こそが全て。それがライアの意見だった。

ここで、ライア＝アールゲントのことを話しておこう。彼は孤児である。しかし、両親に捨てられたとか、病気で死んだのが原因ではない。

五歳の頃、姉が癇癢を起こして殺してしまったのだ。

それ以来、ライアは姉の面倒を見ながらの逃亡生活という苦行のよ
うな毎日を送っている。

別に姉を恨んではない。いつかはこうなるだろうと覚悟はしてい
たからだ。むしろ、生まれ落ちてから五年ももったことの方が奇跡
だとすら思っている。

それから、裏稼業で生活費を稼ぎながら細々と食いつないでいた。
暗殺、護衛、盗みに破壊活動など、営業範囲の広さと成功率の点で
ライアは大人気となっている。稀に、管理局からも依頼が来る程だ。
昔ながらの仲間が、困った時は頼りにしてこいと言ってきた時には
不覚にも感動してしまったが。

「うゝっす、帰ったぜえ」

「おかえり」

部屋に入ると、大変珍しいことに姉——アリス「アローゲントが
起床していた。思わず壁に掛けてある時計を確認する。午後4時3
0分だった。

「……アリス、お前どおしたんだあ？今日はやけに早起きじゃねえ
か」

信じられないかもしれないが、アリスが起床するのは午後11時だ。
そこで夕食を食べた後、2〜3時間ほど活動してからまた眠る。こ
れがアリスの生活サイクルである。一日一食で睡眠時間は20時間
オーバー、それがアリスである。

「気分」

「そおかよ。冷蔵庫にアイスあんどお」

「もう食べた。歯を磨いたらまた寝る」

そう言い、スケスケの黒いネグリジェ姿のまま洗面所へと入っていた。ぶつちゃけエロい。

アリスには、人間の三大欲求である『性欲』、『食欲』、『睡眠欲』の内、睡眠欲しか存在しないらしい。腹は減らないし、異性にも興味が湧かないのだとか。

その分、一回の食事量が多い。大の男の五人前くらいを平気で胃に収める。食費が嵩むのがライアの悩みだった。

そして、アリスの睡眠に対する執着は恐ろしい。

寢床のためならば金（ライアが稼いだ）の妥協はせず、寝ている間は防音の結界を絶対に忘れない。寝ている最中に起こそうものなら、それこそ命はない。両親は熟睡中のアリスを起こしたことで、家ごと消し炭にされたのだ。

良くも今まで生きていられたものと、ライアは逆に感心してしまった。運とは凄まじいものである。

「はあ、前途多難だあ」

しかも、悩みはこれだけではない。

先ほどの、仕事ついでに戦ってみた少年——アスカ「イクシオン」のこともある。

「ありゃあ苦勞すんどお？教授が細工した人生がまともなはずねえ。

アリシア辺りにあつたら即死すんじゃないかあ？」

ライア「アーロゲントは神である教授からこの世界に送られた、いわば特別^{ゲスト}キャラだ。これからは、彼の人生に度々自分の仲間が立ち塞がり、あるいは補助するのだろう。それでも、ライアには彼がまともな人生を送れるとは思えなかった。

どことなく不幸な匂いがする。

所謂、リアルラックが足りないといった感じだ。

おまけに魔法も思っていた程使いこなせていないし、気概も駄目。お手上げだった。

『彼はこれから故郷の第97管理外世界に帰還するのですか？』

「だろおな」

『それならば時期的に考えると、帰還してすぐに無印に突入することになります』

「あゝ、もうそんな時期かあ」

『はい。あと三ヶ月です』

たったの約90日だ。これだけの日数で、あの少年は戦いの運命を受け入れることができるのだろうか？

ライア個人としてもアスカが強くなって再び戦えるのならば、それに越したことはない。それを別にしても、彼には人生を謳歌してもらわなければ困るのだ。

「ま、ルナが何とかすんだろお」

思考停止。困った時はあのリーダーに任せておけば良い。

ルナは優秀だ。誰よりも上手く社会に溶け込める。だからこそ、アスラの身辺に生まれ落ちるように命令されたのだ。少なくとも、アリスやあの馬鹿ツインテールに任せるのよりかは兆倍安心できる。

「まあ、元々無印は見物に徹する気だったしなあ」

『あの転生者がどのような行動をとるのか、とても興味があります』

そう、今回は戦力を総動員してまで戦う必要はない。所詮は遊びだ。死にそうになれば、ルナが力尽くで何とかするだろう。

「まあ、俺が参戦する予定のstssまで生き残っていれば褒めてやるよ」

原作開始まで、残り86日。

第六話

「アスカⅡイクシオン。施設に監禁中、五人の子供を殺害。しかし、それは強制されていたことであり、環境を鑑みてもやむを得なかった行為と思われる。」

よって情状酌量の余地有りとして、無罪放免とする」

それがアスカに下された判決であった。

アスカが娑婆に戻ってから一ヶ月、裁判は比較的速やかに行われた。その間に両親に連絡が行き、管理外世界からわざわざ足を運んでくれたのだった。

殴られたが。

「クソッ、二年ぶりに会って真っ先に殴るとか……」

『それほどマスターのことを心配していたのでしょうか』

理解はできても痛みは消えないのだった。

アスカの両親には全てが伝えられた。魔法のこと、次元世界のこと、管理局のこと、そしてアスカがどのような目に合ってきたのかも、全て。

それに二人は動揺したものの、アスカに対する態度が変わることはなかった。

「肝が太いよなあ」

『私もそう思います』

それからアスカが家に戻ったのは半月後、二月の半ばであった。家に戻るのは居候のことも相成り、実に数年ぶりのこととなる。しばらくの間は両親も仕事を休み、家族三人で実家で過ごすことになったのだった。

十　　十　　十

「……へえ、そんなことが」

アスカは現在、自宅の床に正座している。視線は下を向いており、良く見るとその身体は小刻みに震えている。原因は、目の前にいる鬼だった。

「あ、あの、瑠奈さん……？」

「何でしょうか？」

表面上はにこやかに、されど射殺するようなプレッシャーを放ったまま瑠奈は答えた。

その姿は最後に会った時とさして様子は変わらず、肩に掛かる銀髪も蒼い瞳も変わらない。強いて言うならば背が伸びたということくらいだろうか？

「それで、拉致されて魔法を教わって半殺しにされて帰ってきたと」

「い、いや、その……はい、そうです」

反論しようとする、視線が一瞬強まった。アスカに言論の自由は存在しないのだった。

「あ、あれだ！心配かけて悪かった！」

「……はあ。もう良いです。流石に虐めすぎました」

すると、プレッシャーが和らいだ。

溜め息を吐きながら、瑠奈は姿勢を楽にするように促す。

「まあ、今まで云々はもう結構です。それで、アスカくんは今後どうするのですか？」

「どつて？」

「魔法を忘れて日常に帰るのか、それとも違うのか、ということですよ」

その言葉に、アスカは窮した。

アスカの記憶が正しければ、もうじき無印が始まる。その時に、自分はどうするのだろうか。

介入はしたい。しかし、もうあんなことになるのは懲り懲りだ。怪我は嫌だし、危ないのも御免だった。しかし、転生した以上は介入も……。

アスカの中で、それらの思いが葛藤した。

「……それはまだ、わからない」

結局、答えは出なかった。

「……そうですか。それじゃあ、答えは保留ということで」

すると、瑠奈はアス力が思っていたよりもアツサリと引いた。アス力は、もっと問い詰めてくるものだと思っていたため、拍子抜けだった。

「良いのか？こんな曖昧な答えで」

「だって決まっていらないのでしょうか？それでしたら、答えが出るまで待つのみです。それに、どうせ——」

「え？何だって？」

「いえいえ、別に何でもありません」

そう言って、瑠奈は家に帰っていった。

『それに、どうせ非日常に参加するのは決まったようなものですね』
『』

その呟きは、誰にも聞かれることはなかった。

＋　　＋　　＋

自宅にある自室に戻った瑠奈は、机にしまっていた小物をいつもの位置に配置し、押入れに隠された装置を起動した。すると、ブウ

ンという起動音と共に、通信が繋がる。

「それでは、定例会議を開始します」

次元間通信装置を起動させた瑠奈の顔は、もうアスカの幼馴染の顔ではなく、教授に仕える殺戮者——ルナの顔だった。

『アイツの様子はとうだったあ？もうリタイアかあ？』

ルナの宣言に反応したのは、机の上に乗っているエアガン（の横に置いてあるスピーカー）だった。

「いえいえ、まだ悩んでいる様子でしたね」

『だったら一々報告しなくて良い。結果だけがわかれば充分』

そう苛付いた声で応えたのは、ベッドの上にある西洋人形（が手に持っているスピーカー）だった。

「ありやりや、そういえば睡眠中でしたね。これはすみません」

『それで？万が一、このまま彼が原作から逃げ出したらどうするんですか？』

今度は、エアガンの隣に置いてある某世紀末の拳王フィギュア（の横に——以下略）が質問してきた。

「それは無理ですね。彼は教授から、『主人公体質』の加護を受けています。下手すると、自殺もできませんよ。最終回でもない時に自殺が成功する主人公なんていませんし」

『うつわゝ、残酷』』

と、壁に飾ってある草刈り鎌が答え、

『もはや呪い以外の何でもないわね』

と、箆筥にある煙草のケースが皮肉げに呟き、

「それが主人公の運命です、すみません」

と、人形のような大きさの少女が曖昧に笑い、ルナの肩に飛び乗った。

『え！？じゃあ結局は戦うの？』

弾んだ声で『S c h o o l D a o s』のDVDが問いかけ、

『う、うん、たぶん』

雪ダルマのぬいぐるみがそれに応えた。

なんとも奇怪な空間で、ルナは平然と受け答えをしている。そんなルナこそが、最も奇怪であった。

「どのみち彼は原作に関わります。なので、各々は対処を誤まらないように。特にアーロгент姉弟、注意してくださいね」

『ういゝッス』

『わかった』

「よろしい。それでは、次の報告です」

ルナの言葉に、皆は訝しんだ。全員が、これでルナの報告は終わったと思っていたからだ。

『まだ何かあのかあ？』

「はい。これはかなり重要な案件なので、心して聞いてください」

場が静まり返る。そして、

「どうやら、アスカ・イクシオンの他にも転生者がいるようなんです」

さらなる沈黙が部屋を包み込んだ。

幕間

視界いっぱい広がる無人の白い空間、そして目の前には見知らぬ男。

それらの光景を見て、男は全てを理解した。

「悪いな、こっちのミスでお前は死ん——」

「転生キタアアアアア！」

思わず叫んでいた。

神のミスで転生するというテンプレな展開。そして繰り広げられるチートとハーレムの数々。

男は、それらのことをネットの二次創作サイトで読むのが趣味だった。家からは一步も出ず、バイトもせずに親の収入を頼って生きる穀潰し。親に生かされ、友人すらもない生活に、彼はホトホト飽きていたのだ。

「あゝ、やっぱりそういう反応か。まあ良い。それで、お前の想像通りに転生してもらっ——」

「それじゃあ場所は『リリカルなのは』で『BLEACH』の斬魄刀の能力全部と無限の剣製と大嘘憑き（オールフィクション）と『ONE P.O.C.E』の悪魔の実の能力全部と写輪眼と複写眼と輪廻眼と直死の魔眼と『と。る魔術の禁。目録』の能力全部とニコボとナデポがあって顔はイケメンで銀髪でオッドアイでヒロインの幼

アルファステイグマ

馴染で頭も良くてチートボディで魔力量はSSSでデバイスも最強で可愛いユニゾンデバイスも持ってるてそれから——」

[illegible]

自分の欲望を吐き出し続ける男に、神こと教授がキレた。

「さっきから人の話を遮りやがって、ぶっ殺すぞデメエ！」

「ええ！？」

「しかも、お前は確か今年で二十八だろうが！ 厨二ぶっこいてんじゃねえ！」

「ちゅ、ちゅう……」

「しかもニコポにナデポだあ？洗脳攻撃はもういらねえんだよ、この二番煎じが！」

「え、ええええええ……」

男は、想像していたものとかかなり違う神の態度に困惑した。

——これじゃあまるで俺が悪いみたいじゃないか。

自覚もなかった。

「……………はあ。まあとにかく、お前が転生するのは確定している。世界はリリカルでマジカルな世界で良い。お前が言ったような能力特典は無理な」

「はあ！？テメエ、自分のミスで人を殺しといてサービスもできないのか！はっ、神が聞いて呆れるぜ！この駄目神！メガネ！使えねえ！」

「……………その代わり、テメエの転生先はかなり優遇されるようになってる。まあ、イケメンくらいなら叶えてやるよ」

「ああ？そんなの当たり前だろうが！むしろ、これだけかよ？チツ、マジで使えねえ」

「……………魔力量もヒロインたちと同じくらいはやる。原作に介入するも管理局アンチも好きにやれ」

「はんっ、ようやくまともになってきたじゃねえかよ。それで？他にはねえのかよ？」

「……………デバイスも何だかんだで手に入るようにしてやるよ」

「ケッ、んじゃ、それで満足してやるよ」

そう言つて男はニマニマと笑い、原作に介入してクロノを、グレアムを、リーゼたちを倒してヒロインのハーレムを作ることを考えるのだった、

「……………んじゃ、赤ん坊からやり直すことになる。第二の人生を楽しんでこい」

「なのはは小学校までに落とすか。フェイトはプレシアから開放してやってメロメロにして……くっひひひひ」

もはや男は教授の言葉など聞いていなかった。

足元に穴が開き、そこに落ちていったことに気づいたのかすら怪しい。

「っははは！俺が、オリ主だ！！」

「死ね、死ね、死ね！あの屑が！穀潰しが！社会不適合者が！ニートが！引き籠もりが！ゴミが！社会の害悪が！紐が！虫が！厨二が！」

男が消えた後、教授はひたすらに机を殴り続けている。今の今まで我慢してきたが、流石に限界であった。

「クソッ！書類が重なっていたとかふざけやがって！！」

少し前に転生していった男——アスカⅡイクシオン。あの液体まみれの書類には、なんと他人の書類が重なっていたのだ。その影響で二人目の転生者を出す破目^{ハメ}になったのだった。

しかも、このことは部下たちも知らない。教授が気づいたのは、既に全員が転生先に移動していったあとだったのだ。もう連絡はとれない。昔と違い、最近はそうだったことが難しい時代なのだ。転生でさえかなり危ないというのに、神から人間に連絡などできるはずもなかった。

「チツ、どうなるかは知らねえが、マズイことになった。頼むぞ、部下たち」。お前たちの『接客』に全てがかかっているからな」

祈るような気持ちで教授は呟いたのだった。

第七話

【誰か、僕の声を聞いて……力を貸して……魔法の力を……】

「……とうとう来たか」

四月もまだ始まったばかりの頃の深夜、突然の念話にアス力は目を覚ました。

アス力は無事に小学三年生となり、学校に復学していた。長期に亘って学校を離れていたのは、家の都合により父親の実家がある海外にいたからということになっている。そんな最中の念話であった。

『マスター、今の念話は……』

「……放つとくぞ。俺はもう、魔法には関わらないって決めたんだ」

これがアス力の答えだった。

あんな命が幾つあっても足りないような日常に飛び込むことなど、命のやり取りを経験したアス力にはとてもではないが無理だった。よって、原作は全てやり過ごし、平穏な一生を送ろうと決心したのだ。

これには瑠奈も納得した。それならば、もうこの話題も二度としなとも言っていた。アス力は気づかなかったが、瑠奈はその時、含み笑いをしていたのだが。

『マスターがそう仰るのならば』

「ああ、悪いな」

その謝罪はデバイスに向けていたのか、それともまだ見ぬユーノ・スクライアに向けていたのか。

＋　　＋　　＋

アスカは現在、瑠奈の家である北条家ではなく自宅で生活を送っている。

瑠奈がつくった朝食を食べられなくなったことはアスカにも残念であったが、朝から妙な寝技を掛けられることもなくなった。しかし訓練時代の癖が抜けず、毎朝定時に起きてしまうので、どちらにしろ関係なかったかもしれない。

出張がなくなり家に居る両親と朝食を摂ったアスカは、余裕をもって家を出た。

「あ、アスカくん。おはようございます」

家の前に瑠奈がいた。

「早っ！？お前いつからそこにいたんだよ」

「今来たばかりですよ」

コロコロと鈴を転がすように笑う瑠奈だが、アスカは瑠奈よりも早く家を出たことがないのだった。現に今日も普段より三十分近く早く出たのだ。

「お前、実は俺のストーカーとかじゃないだろうな」

「身の程を知れ。お前をストーキングするなど人生の無駄だ。

……まったくも、長年の付き合いじゃないですか。今日は早く出てきそうだな」と思っただけですよ」

即答された瑠奈の本音に、アスカは怯んだ。表情は刹那の間に能面のようになり、空気の温度は十度くらい下がったのではなからうかすぐに元に戻ったが。

「ささつ、学校に参りましょう。今日は時間に余裕があるので、ゆっくりと登校できそうです」

そう言つてアスカの手を引く瑠奈は、間違つても男子には見えなかった。

＋　　＋　　＋

授業が終わり、昼休み。

終わった瞬間に席を立ち上がった瑠奈は弁当を驚掴みしてアスカの元へ走り、自分の弁当を持ったアスカの頭を余った手でアイアンクロー。そのまま教室を飛び出した。

「ぐうああああ！？痛エから瑠奈さん痛エからッ！」

そう叫ぶアスカを無視し、まるで紙でも引つ張るかのように廊下を爆走する瑠奈。その姿は既に学校の名物となっていた。そのまま屋上へと階段を上りきった瑠奈は、一番景色の見晴らしが良い席にダイブする。

「とうちゃく！一番乗り！」

「あっただだだだだ！！」

人間とは思えない握力と筋力に翻弄されたアス力は、涙目で地面に蹲る。

「うむ、今日も快調です。やっぱり私って天才ですね。」

「俺は絶不調だッ！」

わかったわかったとばかりに手をヒラヒラと振った瑠奈は、ベンチに座って弁当の包みを開けた。それに倣い、痛む頭を摩りながらアス力も弁当を開く。

「お前、俺に何か恨みでもあんのか？毎度毎度アイアンクローって普通に来れば良いじゃねえかよ」

「ん、実は、他のクラスの方なのですがね。私を昼食に誘ってくる人がいるのです」

「それがどうしたんだよ？」

「ぶっちゃけキモいんで来る前に退避です」

瑠奈が猫かぶりモードで他人の悪口を言うとは。ソイツは相当にキモいのだろう、とアス力は納得した。

そう話している間に、周囲は少しずつ騒がしくなっていた。この

屋上は他の生徒にも人気の昼食スポットであるため、昼休みは意外と混雑するのである。

「ッげ」

その時、瑠奈が突然ゲンナリとした様子で肩を落とした。不思議に思ったアスカが瑠奈の視線を追うと、

そこに、絶世の美少年がいた。

金髪の髪は太陽のように輝き、二つの碧眼はまるで海のように深い。笑った顔は花が咲いたように美しく、まったく非の打ち所がない完璧な造形であった。『貴公子』、その言葉が最もしっくりくる。

「知り合いか？」

「例のキモい人です」

瑠奈は視線をさっさと弁当に移し、食事に専念し始めた。

そんなことはお構い無しに、その美少年はまっすぐにこのベンチに寄ってきた。

「やあ、瑠奈。こんな所で会うなんて奇遇だね」

「……ですね。お久しぶりです、鷺ノ宮さん。アスカくん、紹介します。この人は鷺ノ宮 蔵人さんです」

「……よろしく」

そう言つて蔵人はアスカを一瞥した。足から頭まで見やると蔵人はアスカを鼻で笑い、再び瑠奈に視線を移した。

「瑠奈、これから僕と一緒に食事でも——」

「結構です。私はアスカちゃんと食べているので。用はそれだけですよね？」

そう言つて瑠奈は屋上の反対側にある空きベンチを指差した。スマイル100%でありながら、声色は絶対零度である。

「つれないね。僕と瑠奈の仲じゃないか。それに、僕のことは『クロード』と——」

「そういうことは女子に仰った方がよろしいかと。同じクラスにすらなつたことのない鷺ノ宮 蔵人さん」

瑠奈がそう言つと、蔵人はやれやれと首を振つて去つていった。行き先は、同じく屋上で食事をとっているのはたちのベンチである。

「……なんだ、アイツは？」

「三年一組出席番号14番『鷺ノ宮 蔵人』。成績優秀、スポーツ万能、人当たりも良く先生方の評判も上々、容姿端麗で家柄も良し。絵に描いたような完璧超人です」

「……スゲエな」

「ちなみに、女子間で行われた『将来結婚したい男子ランキング』

では学年一位でした」

「そんなランキングやってんのか!？」

「私はかなり低位置でしたけどね」

「意外だな。お前って結構良い物件だと思うんだが」

「きつと『将来結婚したい女子ランキング』で校内一位だったのが原因だと思います」

「別の意味で意外だ!？しかも校内!？」

男子には大人気の瑠奈。アス力は知らないが、瑠奈の二つ名は『女子以上に手が届かない存在』、『リアル男の娘』、『ナンバーワンよりオ世界に一つだけの花』であった。

十 十 十

そして夜、アス力は早々に寢床に入っていた。原作に関わらないと決めてしまえば、もう気にしても仕方がない。そう考えたアス力は、徹底的に無視を決め込んでいた。

【聞こえますか……？僕の声が……聞こえますか……？】

『マスター』

「無視しろ」

『了解』

阿咩の呼吸で無視を決定した主従の二人は、狸寝入りを決め込んだ。そもそも、今は魔法で戦闘を行うなど常識にもほどがあった。アス力は現在、裁判の直後で保護観察中なのである。そんな時に騒ぎを起こすなど言語道断なのであった。

それを理解しているからこそ、ベルセルクも何も言わない。精々、管理局に通報するくらいが限度だろう。

アス力はもう原作を大筋でしか覚えていなかった。だが、それでもここは無事に事件が解決したということくらいは覚えている。かなり曖昧で、細かいところは覚えていなかったが。

だからこそ、二つの特大魔力を感じた瞬間に飛び起きた。

＋　＋　＋

瑠奈は日が沈んでからずっと電信柱の上にしゃがみ込み、動物病院を観察していた。見つからないように魔法で偽装しつつ、周囲を探查魔法で監視している。

夜が更け始めると、ユーノ＝スクライアが無差別念話を周囲にばら撒いた。しばらくすると、近づいてくる気配が二つ。

「アスカくんではないでしょうね」

探查の反応があった方向を見やると、栗色の髪の少女が一人と金髪の少年が一人。なのはと第二の転生者——蔵人であった。二人が動物病院に到着するや否や、結界が展開、その後は原作通りになるが『レイジングハート』を起動させるはずだった。

ユーノがデバイスを二つも持っていなければ。

「『ブレイブソウル』！セットアップ！！」

その掛け声と共に、上空を白金の柱が貫いた。直後、桜色の柱も負けじと立ち上がる。

「魔力量はほぼ同等、AAAランクの大物です」

光の柱がゆっくりと消え、後に残ったのはバリアジャケットを纏った二人だった。

なのはは原作通り、蔵人は……。

「うん？どこかで見たことあるような」

『錬。の騎士のデザインですね』

「ああ！どつりで赤いな」と思ったら」

しかも、デバイスのデザインはレイジングハートとほぼ同じで、フレームが銀色だけだった。バリアジャケットと杖が絶望的にミスマッチしている。

「センス無いですね」

『カオスです』

一人と一機がそう話している間に、戦闘は始まっていた。もつともバリアで防いで封印するだけなのだが。そのまま即終了。二人は夜

道を逃げ帰っていった。

「さてさて、これからどうなることやら」

『非常に先行きが心配ですね。……ッ、マスター』

「おっと、もう一人の主役が来ましたか」

遅いですよ」と言い残し、瑠奈は夜の闇へと消えていった。

＋　＋　＋

アスカが駆けつけた時、既に戦闘は終わっていた。アスファルトは砕け散り、電柱は横倒しになっている。

「クソッ、遅かったか！」

『マスター、探査魔法を使えば追いきれるかもしれません』

「……いや、良い。今日はもう帰ろう。これ以上ここにいるのは面倒だ。騒ぎを聞きつけて既に警察が動き始めている」

そのままアスカはそこを立ち去った。

——この世界は、俺が知っている原作とは違う。

そうアスカは考えた。このままでは、いつ自分が巻き込まれるかわからない。

まだほんの僅かの違いだが、アスカ＝イクシオンという存在自体が差異そのものなのだ。何が起こっても不思議ではない。

「……ベルセルク、明日から少し調べるぞ。なるべく隠密にな

『了解しました』

こうして、アスカは無自覚のうちに事件へと関わっていくのであった。

第八話

鼓動するかのように空中の魔力素が震える。平衡感覚にまで影響が出そうな莫大な魔力反応。

「来たな」

学校が終わり、瑠奈と一緒に下校していたアスカは、帰路の途中でジューエルシードの発動を察知した。

「何が来たのですか？」

「瑠奈、悪い。ちょっと行く所ができた」

そう言い残し、アスカは駆け出した。場所はおそらく神社。原作は覚えていないが、発動地点はその辺りだ。飛行魔法が使えれば良かったのだが、街中ではそれもできない。走って向かうしかなかった。悪いことに、アスカの家は神社からは正反対の位置にあり、どうしても時間がかかる。魔力による身体強化を全開にしてはいたが、なのはたちよりも遅くなることは確実だった。

——間に合え！

せめて、もう一人の魔導師の正体くらいは知りたい。その一心で、アスカはアスファルトを踏みしめていった。

結局、アスカが現場に着いたのは発動してから三十分後だった。その頃には既に魔力は感じられず、現場は静かになっている。

「チツ、間に合わなかったか」

原作をほとんど覚えていないアスカでは後手に回らざるを得ない。そのため、多くの転生者が使える待ち伏せなどではないのだった。アスカが覚えている事件は、最初の事件、巨大樹の事件、海での事件、それから決闘だけだった。途中で管理局が介入していた気もするが、それも曖昧で頼りにならない。八方塞だった。

その時、それは聞こえてきた。

「なのは、大丈夫だったかい？」

「うん、レイジングハートが守ってくれたから」

聞こえてきたのは男女二人の声。アスカは咄嗟に物陰に隠れた。声の主の一人は間違いなく高町なのはであった。そしてもう一人の声。それは、

「鷲ノ宮 蔵人……！？」

先日、瑠奈がキモいと言っていた蔵人であった。あの金髪は忘れようもない。その手には青い石が握られている。偶然あの場に居合わせたとは思えなかった。

イケメン、原作介入、デバイス、特大の魔力量、同じ学校。

これらの情報から、アスカは思い至った。

「俺以外の、転生者……？」

しかし、それならば全て納得できる。そして、それはアスカが無理に原作に介入しなくても、物語が良い方向に向かうことを示していた。

「……そっか、なら安心だな」

アスカの心中は複雑だった。原作に介入しないと決めたものの、自分は今この物語には必要ないと言われたような気がしたからだ。しかし、同時に安心もしている。

『マスター、どうなさりますか？』

「……管理局に通報はした。一般人の俺にできるのはここまでだ」

アスカは踵を返し、帰路に就いた。その背中が、どこか哀愁が漂っていたのだった。

＋　　＋　　＋

その後、何事もなかったかのように日常は過ぎていった。

唯一あったことといえば、数日前に街中でジュエルシードによる巨大樹事件が起こったことだろうか。幻覚説や宇宙人説、はたまた黒魔術説などが渦巻く中、アスカは全てを無視して過ごしている。

近々、なのはが蔵人と一緒に月村家へ行くという話を小耳に挟んだが、そんなことはアスカの人生には一片たりとも関係ないのである。ないのである！！

「アスカく〜ん」

連休が迫ったとある日、瑠奈が普段通りののほほんとした口調で席に寄ってきた。時間は放課後、後は家に帰るだけである。

「おう、帰るか」

「です〜」

そして下校。

ああ、平和って素晴らしい。アスカがそう思った矢先だった。

「そういえば、今度の連休にウチの両親が温泉に行くらしいのです〜。よろしければ一緒にどうですか〜」

「温、泉……？」

瞬間、アスカの脊髄を何かが走り抜けた。戦闘で培われた第六感が、全力で警報を鳴らしている。これは、そう、敵に背後を取られた時や、武器を弾かれた瞬間に味わったような……。

「いや、俺は……」

「……あ〜、そうですか〜。まあ、連休は両親と一緒に過ごすべきですよ〜。すみません、配慮が足りませんでした〜」

そう言って残念そうに笑う瑠奈。罪悪感が凄まじかった。

「いや、行く。問題ない。バッチリだ」

反射的にそう答えるアスカ。一秒後には後悔したが。

「そうですか〜！嬉しいですよ〜」

先程とは打って変わって花のように笑う瑠奈に、もう撤回はできないと悟る。もしここで断れる男がいれば、ソイツは冷血漢に違いない。アスカはここにはいない誰かに言い訳した。

十 十 十

「温泉 ♪ 温泉 ♪ おんせ〜ん ♪」

歌詞には温泉しかないはずなのに、なぜかリズムの良い歌を口ずさむ瑠奈。何がそんなに嬉しいのだろうか？アスカには理解できなかった。

時は連休一日目、さつそく旅館に到着した北条家＋アスカは、温泉へと直行していた。二人の背後には、大熊のような図体の巨漢がのっそりと付いてきている。北条家の亭主であり、瑠奈の父である。

温泉に行く際にあたって、『娘を視姦したら殺すぞ』というありがたいお言葉をアスカは貰っている。娘じゃないというアスカのツッコミは鼻で笑われてスルーされた。瑠奈のどこにこの野獣の遺伝子があるのか。謎である。そして、その隣にいるのが瑠奈の母である。おっとりとした美人で、なるほど、この女性からならば瑠奈が生まれても不思議はない。髪は二人とも黒いが。

そして温泉に到着、行き先はもちろん男湯三人、女湯一人。女湯に行けという父の言葉を父同様に鼻で笑ってスルーした瑠奈は、父の

脛を馬鹿力で蹴り飛ばし、そのまま男湯に入ってしまった。
ちなみに、瑠奈は本気になれば学校の机くらいならば余裕で蹴り碎けるらしい。

痛みで蹲る瑠奈の父を置いて、アスカと瑠奈は温泉へ突入した。

「おや、瑠奈じゃないか！こんなところで会うなんて奇く——」

即効で撤退した。

「おう、なんか変なパツキンがタオル腰に巻いてましたよ」

「いやいや、現実逃避すんなよ」

「うゝ、父と母には申し訳ありませんが、もう帰りたくなってきました」

それにはアスカも同感であったが、そうも行くまい。再び温泉に突入した。

その後の詳しい経過は省くが、やたらと瑠奈の身体に触ろうとしてきた勇者が、医務室に運ばれたとだけ明記しておく。

十 十 十

深夜、良い子はもう寝る時間帯。

嫌な予感がしたアスカはなかなか睡眠できず、布団の中で瑠奈としりとりをしていた。

「パツキン死ね、の『ね』です」

「ね……猫？」

「殺す、の『す』です」

「す……スズメ？」

「目玉抉るぞ、の『ぞ』です」

「……………」

よほど頭に来ているらしい。

しかし、実際のところ、蔵人の蛮勇も仕方なかったとアス力は思う。タオルがあっても、やはり瑠奈は女子にしか見えなかった。それと、なぜ腰ではなく身体全体を隠すようにタオルを巻くのだろうか？

「……やめよう、気が滅入る」

「そうですか」

それっきり無言になる二人。両親は早々に寝てしまい、もう起きているのは二人だけだ。一泊したら帰る予定なため、明日は朝風呂に入ってから帰ることになっている。

「……なんだか喉が渴きました」

そう言つて瑠奈はのっそりと起き上がり、財布を持って部屋を出て行くこととする。

「おい、待てよ。俺も行く。一人だと危ないかもしれないだろ」

もちろん、瑠奈を襲ったりする馬鹿である。以前、瑠奈は痴漢を集中治療室に送ったことがあるため、笑える話ではない。医者曰く、『ダンプカーと衝突でもしたのかね?』。

二人で廊下の自販機まで行った時だった。

ここ数日で慣れてしまった、魔力の鼓動をアスカは感じた。

「ッ!？」

思わず発生源がある方向を睨みつける。

「どうかしたのですか?」

「え? あ、いや、何でもない」

「む? ? それなら良いので……あ」

瑠奈が驚きの声を上げる。アスカがその視線を追うと、なのはと蔵人が二人で部屋を抜け出すところだった。二人はアスカたちに気づかず、逆方向——旅館の出口へと走っていった。

「……行きましょう」

「どこへだよ?」

恐る恐る聞くアスカに、瑠奈は満面の笑みで答えた。

「あの二人の逢引を写メで撮って、学校中にはら撒いてやるのです」

「性格悪ッ!？」

虐めっ子の発想だった。

しかし、ここに来てアスカは思い出した。そう、これは原作にあった出来事だ。温泉でジュエルシードが発動し、それを抑えるためになのはが動く。アスカは全力で逃げ出したかった。

「いや、そんな意地悪なことやめようぜ。恋するのは誰だって自由だろ？」

「っは、冗談。あのパツキンの弱みを握って、二度と学校に来れないようにしてさしあげますよー!」

「あ、おい待てッ!」

そのまま瑠奈は猛烈ダツシュ。二人の追跡を始めた。そのまま廊下の角を曲がり、あっという間に姿が見えなくなる。

「だあゝ!クソッ!行くしかねえか!」

ベルセルクは腕に付けている。普段から身に着けるといいう習慣に、今ほど感謝したことはない。

しかし、急いで後を追いかけるものの、三人の姿は一向に見つからない。どうやら完全に見失ったようだ。しかし、大声を上げて呼び

かける訳にもいかない。他の連中に見つかる。そもそも、転生者が二人だけという保障すらないのだ。危険はできるだけ避けたかった。その時だった。

「——ッ、これは、魔力反応!？」

アスカは近くで魔力を感じ取る。おそらく、既に戦闘が始まっているのだろ。万が一、瑠奈が巻き込まれた場合を考えると、アスカは気が気ではなかった。

「行くぞ！ベルセルク！」

『All right』

一瞬でデバイスを展開したアスカは、空へと飛び立った。

＋　　＋　　＋

なのはと蔵人は、原作通りにフェイトⅡテストロッサと対決していた。

ユーノは既に使い魔のアルフと共に強制転送魔法で移動しており、状況は二対一と、蔵人たちが優位に見える。

「で、どうするの？」

「話し合いで、何とかできるってこと、ない？」

フェイトの問いかけに、あくまで話し合いを求めるなのは。

「私はロストログアの欠片を、ジュエルシードを集めないとけない。そして、あなたたちと私はジュエルシードを懸けて戦う敵同士」
話は終わったとばかりに、フェイトはデバイスを構える。

「だから、そういうことを簡単に決め付けなために話し合うんだ！」

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きつと何も変わらない。伝わらないッ！」

蔵人が叫ぶものの、それを一蹴してフェイトが二人に襲い掛かる。
目にも留まらぬ速さというものを、蔵人となのはは思い知った。

一瞬で背後に回ったフェイトは、黒斧——バルディッシュをなのはは一閃。危ういところで避けたなのはは、そのまま上空へと身を躍らせた。その隙を突くように、蔵人がブレイブソウルをフェイトに叩きつけるものの、同じく上空に逃げられる。

——想像していたのよりもずっと速いッ!?

ここでフェイトを倒し、強さを二人に見せ付ける計画だった蔵人にとって、それは想定外のできごとだった。オリ主である自分ならば、原作キャラに負けるはずなどないと高を括っていた。

そんな蔵人を置き去りにして、フェイトは上空のなのはを追い詰める。

金色の雷がなのはを襲い、

『Divine Buster』

桜色の光柱がそれを受け止める。そればかりか、なのはそのままフエイトの砲撃を押し返した。

『Scythe Slash』

しかし、直撃の寸前に身を翻したフェイトは、さらに上空からなのはに襲い掛かる。

「やらせない！」

蔵人が二人の間に割り込み、シールドでフェイトを弾き飛ばす。

——よし、このままいけば勝てる！

蔵人が楽観的に思った、その時だった。

「な〜に〜？まだやってるの〜？」

フェイトと全く同じで、それでも何かが決定的に違う声が森に響く。ピタリとフェイトは動きを止め、離れた場所にいるアルフすら身を竦ませた。

一方、蔵人たちも突然の声に驚き、動きを止めていた。

——こんなものは知らない。原作には、こんなことはなかったッ！
中でも、蔵人の焦りは最高潮に達していた。そして、フェイトの眩
きが蔵人を更なる混乱に陥れる。

「ね……姉さん……」

その声は怯えきっており、手足が俄かに震えだす。

そして、

「はあゝい、フェイトが大好きなスぺアお姉ちゃんだよゝ」

声の主は唐突に現れた。空中のなのはたちをフェイトと挟むように
現れた彼女を一言で表すならば、『白』の一言に尽きた。

雪よりも白い髪を二つに結び、瞳はフェイトよりもなお赤い。肌も
病的に白く、左目にはその顔に不釣り合いな漆黒の眼帯をしている。
フェイトと同じデザインの白いバリアジャケットを纏った彼女。腰
に両手を当てたその姿は年頃の少女にしては少々異常だった。

「ど、どうして、ここに……？」

「決まってるじゃん。帰りが遅いから探しにきたんだよ！もゝ、
アルビノのお姉ちゃんを外出させるなんて、フェイトとアルフは悪
い子だなゝ」

「ひっ」

悲鳴を上げるフェイト。それもそのはず。たった今までフェイトの反対側にいた彼女が、気がつくとフェイトと肩を組んでいたのだ。

「で？どうして遅れちゃったのかにゃ〜ん？」

「う、ごめんなさい……！すぐに、終わらせるからッ！」

「お姉ちゃんは理由を聞いてるんだけどな〜？」

「そ、それは——」

「あ、言わなくてもわかつちゃうよ〜お姉ちゃんは！あの子たちが邪魔したんでしょ〜？」

スツとなのはと蔵人に視線を向けたスピアはニタリと笑い、

「とりあえず、あなたたちは首チョンパで勘弁してあげるお〜」

高々に宣言した。

＋ ＋ ＋

その様子を、ジッと眺める視線が一つ。

蔵人たちが戦っている空中の遙か上空、雲に届くほどの高高度。

『とうとう来ましたね』

「ですね〜。私たちの第三の刺客、いえ、私を抜けば二番目ですね

」

自販機で先程買ったジュースを飲みながら、傍観者——ルナは笑う。

『しかし、彼女をこんな初期に投入してもよろしかったのですか？』

「構いません。きっとお強い『主人公』が何とかしてくださいます。せつかくここまで連れてきたんですし」

とはいえ、ルナも心配ではある。成長のための障害物として立ちはだかるには、彼女では強大すぎる気がしないでもない。最悪、『北条瑠奈』が介入する必要も出てくるかもしれない。

「やり過ぎないでくださいね、アリシア」

第九話

スピアと名乗る少女の登場に驚いたのは、蔵人たちだけではなかった。木々に隠れるように様子を窺っていたアスカも、その存在に驚愕を隠せずにいた。

「何だ、アイツは……？」

自分の記憶の穴というものとは違う存在に、アスカは困惑していた。無印に、あんな少女は登場していなかった。そう断言できる。あんな殺気を撒き散らすような者に、いくら主人公のなとはいえ勝てるはずがない。

「あ、馬鹿ッ！」

アスカの心配を他所に、空中の蔵人は少女に踊りかかった。敵の戦闘力がわからない今、それはあまりにも愚かな行動と言わざるを得ない。普通ならば、遠距離から様子を見るべきだろう。

蔵人は襲い掛かる途中でデバイスを変形させ、杖の先端——コアの部分から魔力刃を伸ばした。どうやらなのはとは違い、蔵人は魔力刃による近接戦闘が主な戦法のようなのだ。しかしその動きは素人丸出しで、フェイトの足元にも及ばない。

「アイツ、死ぬぞ！」

気がつくと、アスカは飛び出していた。介入は諦めた。魔法はもうウンザリ。保護観察。様々な言葉がアスカの頭に浮かんだが、

「命は一つしかねえんだよ！」

＋　＋　＋

新しいキャラクターが現れたからといって、蔵人は臆してなどいなかった。むしろ、原作よりも攻略するヒロインが増えたと喜んだほどだ。この新しいヒロインも、すぐに自分の『物』になる。

「君が誰かは知らないけれど、大人しく話を聞いては……くれないんだろうね」

「もっちょろゝん♪君たちをボコしてぶん取った方が早いしゝ？」

「それならば……仕方ないッ！」

『Saber Form』

そう言うなり、蔵人はブレイブソウルを近距離形態に変形させる。それは、槍というには刀身が長く、剣と言うには柄が長い形態であった。

白金の魔力刃を形成した蔵人は、二人に一気に肉薄した。

「破アアアア！！」

雄叫びを上げて迫る蔵人に対し、スピアと名乗る少女は微動だにしない。ただ、つまらなさそうに見つめるだけだ。一方、フェイトは顔を真っ青にして蔵人を見ている。

——獲った！

自分の速度が速すぎるせいで、二人が反応すらできていないと勘違いした蔵人は、そのまま刃を振り下ろす。

しかし、振り下ろした刃には、何の感触もなかった。

不思議に思った蔵人が刀身を見やると、

魔力刃は——半ばから断ち切られていた。

「ねえ、それが全力？」

そう問いかけるスピアは、その場から全く動いていない。否、フェイトと肩を組んでいない左手。何も持たないそれだけが振り切られたかのように地面と水平に上がっている。

「そんなッ！？」

「はい、一人脱落」

一閃、二閃、三閃。スピアが左腕を振るう。それだけでブレイブソウルは魔力刃を根元から断ち切られ、柄は中央を両断され、バリアジャケットは破壊された。

「ひっ」

「肉を斬って骨も神経も斬るお」

そして四閃目、スピアの左腕が――

「うアアアアアアア！」

――蔵人に襲い掛かる寸前、足元の森から高速で飛来した何者かが蔵人を搔つ攫った。

「馬鹿ヤロウツ！戦いの最中にあんな余裕があつたんだぞ！畏に決まつてるだろうが！」

「な、なんだい、君は！？」

突然の乱入者――アスカの登場に、蔵人は目を白黒させた。蔵人を抱えてなのはの所まで戻ったアスカは、蔵人を解放する。

「え、ええええ！？だ、誰！？あなたも魔法使いなの！？」

「……あゝ、説明は後だ。とにかく、今は逃げるぞ。アイツらはヤバイ」

「待つんだ！突然出てきていきなり何を――」

「わからねえのか！あの白いのがその気になれば、お前はさっきの一瞬で死んでたんだぞ！」

問答無用とばかりに二人を脇に抱えたアスカは、その場を早急に離脱しようとする。

「あ、待って！」

「あゝあゝ？」

あまりのお気楽さに眩暈が起こっていたアスカは、不機嫌を隠すこともなくなのはを睨みつける。

「ひ、あ、あの、じゅ、ジュエルシード……」

『P u t o u t』

レイジングハートからジュエルシードを一つ取り出し、なのははフエイトたちに放った。

「勝負、私たちの負けだから」

「……そう」

そう言ってフエイトがジュエルシードを受け取った瞬間だった。

「でもさ、君たちからここで全部奪った方が早いお？」

一瞬でアスカの前にスピアが移動していた。スピアから皆の意識が逸れた刹那の間に、スピアは瞬間移動さながらの速さで回り込んでいた。

「まず、横入りの君から」

再び無手の左腕が振るわれる。

その瞬間、超反応でアスカはスピアの腕をバインドで押さえ込んだ。

「お？」

「うらァ！」

そして、その横腹に懇親の蹴りを叩き込む。

悲鳴を上げる間もなく吹き飛んだスピアは、回り込んだフェイトに受け止められた。

その隙を逃さず、アスカは全速力で逃走する。そのまま直接旅館に戻るのとは危険なため、少々迂回してから旅館に戻ったのだった。

十　十　十

旅館から少し離れた位置に降り立った三人は、とりあえずそこで一息吐いてバリアジャケットを解除した。

「はあ、久々に死ぬかと思——」

「ああああああ！！！」

「——今度は何だ！」

突然大声を出したなのはを、いい加減に限界だったアスカは容赦なく怒鳴る。

「あ、あのね、ゆ、ユーノくんが……」

「ゆーの？」

「しまったッ！」

はて、誰だったか？蔵人となのはが焦る中、アスカは真剣に思い出せなかった。しかし、アスカは同時に別のことを思い出した。

——る、瑠奈を忘れてたあああああ！！

目的を完全に忘れて戻ってきたアスカは焦った。その時、持ち歩いていた携帯電話が場に相応しい重い音楽を奏でる。『薔薇獄。女』だった。これは、とある個人に限定した着メロである。

「る、瑠奈！？」

『はあゝい、そうですね。今どこですか？』

「……すまん！」

三人を見失ったため先に旅館に戻っていると半分嘘を話すと、瑠奈はアッサリと信用した。しかも、途中で妙な毛色のフェレットまで拾ったという。そのまま戻ってくるらしい。

「はあ、とりあえずは一件落着だな」

「そうだね。後は君のことを話してくれば全て解決だ」

そう言うなり、魔力でデバイスを修復した蔵人がデバイスをアスカに突きつける。

「く、クロードくん！この人は助けてくれたんだよ！」

「でも、怪しいことには変わらないよ」

「あゝ、とりあえず話すから落ち着け」

アスカは、自分が魔法関係者でこの世界の出身だということを話す。今まで助けに入らなかったのは、保護観察中だったため下手に戦闘ができなかったと誤魔化す。誘拐云々は可能な限り暈したが。

「そうか、だいたいのことはわかったよ。それじゃあ、最後に一つだけ良いかな？」

そして、蔵人の顔が真剣みを帯びた。

「君は、『無印』という言葉に聞き覚えはあるかい？」

「……………ああ、ある。俺は映画版派だけだな」

こうして、アスカは原作に介入することが決まった。

第十話

その後、アスカは旅館から北条家と共に帰った。ユーノとは旅館に
いる間に念話で事情を話し合っている。

その結果決まったのが、『ジュエルシードが発動すれば封印を手伝
う』、『ただし、日常では不干渉を貫く』、『この約束は管理局が
来るまで』という三つのことだった。ただでさえ魔法とは関わりを
持ちたくないアスカの、これは最大限の譲歩であった。なのはは納
得していなかったし、蔵人に至っては必要ないとまで言っていたが。

「はあゝ、憂鬱だ」

「あ、朝から溜め息とは、何かあったのですか？」

連休明け、アスカは疲れていた。

正直に言っ、アスカからすればどうぞ三人で頑張ってくださいと
言いたいところを少々手伝うことにした、というのが本音である。
次元断層が起こる可能性がなければ、こんなことは確実に無視して
いただろう。

「はあゝ、生まれ変わったら自由な鳥になりたい」

「そうですね。養鶏場に行かないことを祈ります」

そんな他愛もない話をしていると、

「あ、アスカくん！おはよう！」

「げッ、高町!？」

背後からなのはが声をかけてきた。

「あ、ああ、おはよう」【おい、学校では関わるなって約束だっただろうが】

「うん、えっと、北条さんだよな？おはよう!」【あいさつだけだもん】

「はい、おはようございます。私が知らない間に仲良くなったのですね」

アスカとなのはが念話でコソコソしている中、瑠奈は息子に友達ができたのを喜ぶ親のような顔をしていた。

こうして、アスカはますます原作へと底なし沼のように沈んでいくことになる。

＋　＋　＋

—— 同日、夕方。

「ん、もうゆゝがたあ？」

ベッドからのそりと身を起こしたスペアは、壁に掛けてある時計を確認する。既に四時半を回っていた。

彼女はその体質から、日の当たる日中を部屋の中で過ごしている。別に、バリアジャケットを着て紫外線を弾くように設定すれば問題

はないのだが、魔力も無限ではない。よって、無駄な体力と魔力を使わないように、日が沈む時間までは部屋で過ごしているのだ。

「はあ、貧弱だね、この身体」

『虚弱体質なのは生まれつきです。仕方のないことかと』

スピアの呟きに、男性型の電子音が応えた。その声は、彼女の枕元に置いてある蒼い宝石から漏れている。

「でもさ、生まれに文句を言うわけじゃないけど、もう少し何とかならなかったのかなあ」

『スピアII テスタロッサ』。

魔力量はAランク、急激な魔力の使用が原因で寝込むこともあり、おまけに白弱体質^{アルビノ}。左目は生まれつき視力がない。さらに身体は人間として不完全で、年々身体の機能は落ち続けている。放っておけば数年ともたずに死ぬだろう。そして、このことは母親以外に知る者もない。

「この前なんかさ、魔法の練習で砲撃撃ったら血吐いたもんね」

『ですね。無印の間、あの転生者たちを相手にして生き残れるのかどうか……』

スピアの相棒であるデバイス——ロキはそれが最も気がかりであった。管理局の治療を受ければ、おそらく数年の延命はできるだろう。上手くいけば、二十歳まで生きることだって可能だ。

「あつはは、そんなの無理に決まってるじゃ〜ん」

しかし、スピアは容易くそれを切り捨てる。

「こんな身体じゃ、魔法戦闘になんて耐えられないよ。たぶん、あの中誰かの砲撃を食らっただけで私は死ぬ」

淡々と話すスピアは、既に死期を悟った老人のようにも見えた。そして、それは事実であつた。

特大魔法を行使すれば、それだけで危篤になる自信がスピアにはあつた。おそらく、自分は母親よりも先に死ぬだろう。非殺傷設定だろうと何だろうと、リンカーコアにダメージが来れば死の危険は充分に彼女にはある。そんな状態で戦闘など、自殺も同然であつた。

「私の『仕事』は、転生者に有意義な人生を送らせること。だけど、母さんの役にも立ちたいんだ。こんなんでも娘だからね」

スピアは立ち上がり眼帯を身につけ、寝巻きから普段着に着替え始めた。その身体は痩せ細り、今にも死んでしまうのではないかと思えるほど危うい。それでも、彼女は絶対に弱音を吐かない。それは意味がないから。

「『教授』と『母さん』、どっちも大切にできるのなら、私は命くらい捨てちゃうんだから」

そして、今日も夜が始まる。

「おっはよゝ、グッドモーニング♪」

「もう夕方だよ!」

「流石はアルフ、ナイスツツコミ!」

フェイトⅡ テスタロッサの使い魔——アルフから見て、スぺアⅡ
 テスタロッサの存在は『意味不明』の一言に尽きた。

普段の生活はだらしく、部屋は散らかり放題。ゲーム大好き、漫画大好き、アニメも某笑顔の動画も大好きという半分引き籠もり。人懐こく、煩いくらいに元気という、妹のフェイトとは真逆の存在だった。

それだからこそ、戦闘中の彼女の雰囲気は不気味としか言いようがない。

殺意、狂気、破壊衝動、それらを訓練ですら惜しげもなく周囲に撒き散らすその様子は、もはや別人だと思えなかった。日常では元気な姉、戦闘中は狂戦士^{バーサーカー}。それがアルフがスぺアに抱く印象である。

フェイトとアルフは、スぺアをなるべく戦闘に出したくはなかった。このままでは、いつか本当に彼女は人を殺してしまう。そう思った結果だった。

「それで、フェイトは?」

「部屋で寝てるよ。今から様子を見に行くんだ」

「あ、私も行く」

余談だが、この仮宿は広い。マンションだというのに二階はあるし、窓は大きい。それなのに家具が少ないため、余計に部屋は広く見える。スぺアなどは大量のゲーム機を持ち込んでいるためそこまでではないが、フェイトの私室は最低限の物しかない。よって、実際よりも広く感じるのであった。

「あ、また食べてない」

アルフが部屋に行くと、案の定フェイトは用意した食事を食べていなかった。

「いらなら貰って良い？ちなみに返事は聞いていない！」

フェイトが返事をする前にスぺアは食事を食べていた。

「ちょっと！それはフェイトのだよ！」

「良いじゃん、本人はいらないみたいだし。それに、私って燃費悪いんだよ」

冗談だと一笑に付したアルフだったが、実は笑えないことに事実であった。既にスぺアは、常人の数倍は食事を摂取しないとならないほどに栄養効率が落ちていた。

「……そろそろ行こうか。次のジュエルシードの大まかな位置特定は済んでるし、あんまり母さんを待たせたくないし」

「あ、私も行こうか？もう日没だし、お姉ちゃん的にはバッチグ

「……」

「……うん、平気。お姉ちゃんは身体が弱いんだから休んでて」

「そっか。ゴメンネ、何かあったら呼んでね」

「うん」

実際、フェイトは姉を呼ぶつもりは欠片もなかった。先日の戦闘でも、彼女は相手を殺す一歩手前まで来ていたのだ。後で聞く限りは脅しと言いついていたが、あの眼光は確実に殺すつもりだった。

——私が、頑張らないと。

自分が頑張つてジュエルシードを集めれば、母親を心配させることも、姉を危険に晒すこともない。フェイトの意思は強固だった。

＋　　＋　　＋

なのは、蔵人、ユーノ、アスカの四人は、都市部でジュエルシードを探していた。蔵人は頑としてなのはと一緒に行動すると言っていたため、なのはと二人で行動している。

この辺にある、と大まかにはわかってても、建物と人が多いためなかなかジュエルシードは見つからない。既に日が沈み、アスカたちは門限の時間が近づいていた。

『マスター、そもそも徒歩で見つけようという発想そのものが間違っているのでは？』

「俺も思っけどよ、それしか方法がないだろ？広域探査は疲れるだ

けでそこまで正確に位置を割り出せないし」

『では、魔力流を撃ち込み強制発動を促すのは――』

「できるか馬鹿。街中で暴走されたら意味ねえだろ。それに、ジュエルシードが複数あったらどうすんだ」

やはり、地道に歩いて探すしかなかった。

【アスカくん、私とクロードくんはそろそろ帰るけど、一緒に帰らない？ ユーノくんはしばらく残るって言ってるけど】

なのはからの念話に、アスカは携帯電話で時間を確認した。確かに、もう七時を回っている。

【そうだな、そろそろ帰るか。今どこだ？】

合流地点を決め、途中までは一緒に帰ることになった。そして、アスカが移動を始めた時である。

空が陰った。

街が暗くなった瞬間、雷鳴が轟き、魔力流が発生した。疑いようもなく、フェイトたちの仕業であろう。

「なッ！？ アイツら、こんな街中で強制発動させる気かよ！」

すると、ユーノが機転を利かせたのだろう。結界が張られ、街を隔離した。

【ナイスだ、ユーノ！】

【うん、でも、ジュエルシードが！】

【そっちは任せて！】

【僕となのはが封印する！】

すると、アスカは三箇所から巨大な魔力を感じた。フェイトを含めた三人が、封印魔法を使ったのだらう。

「はあ、とりあえずは安心か」

アスカの最後の心配は先日のスピアだけだったが、それに関しては心配していなかった。

「出てこいよ、いるんだろ？」

一人呟くアスカ。しかし、それに反応する者がいた。

「……………どうしてわかったの？」

近くの車の陰から出てきたのは、スピアだった。バリアジャケットを纏い、前回と同じ無手。それなのに、アスカにはそれが戦闘準備を完了しているとわかった。

「おいおい、そんなに殺気を駄々漏れにしてたら嫌でもわかるっての」

アスカもデバイスを展開し、バリアジャケットを纏う。

「で？俺はジュエルシールドなんて持ってないぜ？それでも闘んのか？」

「ふふふ、だいじょうぶ」

スピアは不適に笑い、

「足止めでじゅくぶんだもん！」

アスカはスピアに突撃した。

＋　＋　＋

正直なところ、侮っていたとしか言い様がなかった。

蔵人を無手で斬っていた光景から、何か特殊な魔法で攻撃をしているタイプだと思っていた。しかし、槍を用いての攻防で悟った。

あれは、幻術で得物を不可視にしている。

片手で扱っているところから刀剣の類かとも思ったが、リーチの長さから考えて長物である可能性もある。まったくもって奇怪な戦法であった。

——近接戦じゃ埒が明かない！

アスカは一旦距離を取り、遠距離戦で様子を見るべきだと判断した。敢えて大振りの攻撃でスピアを引き離したアスカは、流れるような

動作で魔力弾を発射する。

『Cross Fire』

「シュート！」

発射するのは三発、しかし、それとタイミングを僅かにずらして再び三発を発射する。しかし、それはスピアの不可視のデバイスに容易に切り払われ、避けられた。

「デメエ、いつたいどんな武器を使ってやがる！」

「さーあ？ 剣か、槍か、斧か、ひょっとしたら弓かもよ？」

「どこの騎士王だ！」

『Divine Buster』

話している間に魔力をチャージ、そして発射。銀色の砲撃がスピアを飲み込んだ。

「やったか！？」

「やってない」

いつの間にか背後に回りこんだスピアは、その左腕を振り下ろす。防御魔法を展開する時間がなかったアス力は、咄嗟にベルセルクで受け止めた。

右肩に激痛が走る。

「ッ！~~~~！！」

「お、流石おつとこのこ〜」声を上げなかったのは褒めてあげる〜」
アス力は、確かに攻撃を受け止めた。ベルセルクを持つ手にも、手応えは確かにあった。それなのに、なぜアス力の肩に痛みが走ったのか。

「クッソ！そーいや、お前はフェイトの姉だったな！その得物、
鎌」だろ！」

「こ名答！」

『鎌』、柄に直角に刃を取り付けられた異形の武器。元々は農具であつたそれは、武器としての能力は低いと言われる。なぜなら、鎌で物を切断するには、振って引くという二つの動作が必要だからである。それならば、一つの動作で使える剣や槍の方が遙かに使いやすい。

しかし、鎌、特に大鎌は、使い慣れれば恐ろしい能力を発揮する。それがアス力を襲った縦横からの刺突である。

無理やりに下がり、スピアと距離を離れたアス力は肩が挟られていないことに気づいた。どうやら、バリアジャケットに救われたらしい。

今の一撃で右肩には痛手を負ったが、その分、得るものもあつた。

「わかつたぜ、お前の正体！お前は大鎌の幻術使い！高速移動は幻影だ！それに、今の一撃で得物の長さも理解した！もう見えない鎌に惑わされることもねえ！」

フェイトの姉なのだから高速移動はできて当然、その前提に騙されていた。実際は、スぺアは幻術を駆使して地道に攻める技巧派魔導師だったのだ。

「うーん、75点かなあ？一応は合格………はあ、本当の――
――アリシアの身体だったらこんなセコセコした戦い方しなくても良いんだけどね」

最後の方の呟きは聞こえなかったが、それでもアス力はスぺアの戦術の大方を見切った。

その時だった。

急に周囲が明るくなったかと思うと、爆音と共に凄まじい衝撃が二人を襲う。

「何だッ!？」

「隙ありやああああ!!」

爆発に気を取られた隙に、アス力はドロップキックを顔面に食らう。向かいのビルまでアス力を蹴り飛ばすと、スぺアはそのまま転送魔法で去っていった。

「今度は本気出すもんね!」

捨て台詞を残して。

第十一話

「げっは、もう最悪」

フェイトたちよりも一足先にマンションに戻ったスピアだったが、先程の戦闘だけでかなりのダメージが身体にきていたらしい。戻ってくるなり、洗面所で血反吐を吐くことになった。

「うえ、これ消臭しないとアルフに気づかれるし……本当に最悪」

その程度ならば魔法で簡単にできるものの、そのために再び魔力を使つて身体を痛めつける必要があるという悪循環であつた。

「あ、こんな粗末な身体になるなんて、なんという不幸」

「それはあなたを造つた母親に言つてください」

音もなくスピアの背後に立ったのは瑠奈であつた。気配もなく不法侵入をしてきたことにスピアは一瞬驚くものの、すぐに平静を取り戻す。

「ルナ、暇なら消臭やつてよ。私には時間も魔力もないんだし」

「はいはい」

手際良く消臭の魔法を使つた瑠奈はスピアを抱えると、そのままベ

ツドへと運んだ。振動を与えないようにそつと寝かせると、治癒魔法を使ってスペアを修復する。

「あゝ、効く効く。ルルがルナのこと好きなのもわかる気がする。」

「便利アイテム扱いされても嬉しくありませんよ。」

苦笑しながら治療する瑠奈だが、スペアはみるみると顔色を良くしていくのだった。

「それで？無印くらいは生き延びれそうですか？」

「なんとか。でも、砲撃でも食らおうものなら軽く死ねる。」

「ふっ、へぼいですね。」

「あ、鼻で笑った！」

命がかかっている会話とは思えないほどの軽い口調だが、二人からすれば真剣そのものなのである。他の人間が見ればそうだとは思えないだろうが。

「アリシア、あなただって忘れてるわけじゃないでしょう？私たちには、『弱体化ルール』がかかっているんですよ？舐めてかかったら、先に原作キャラに討ち取られます。」

「わかってるよ。」

『弱体化ルール』、それはルナたちに科せられた縛りである。

通常、彼らが本調子で転生すれば、それこそ一騎当千の強者となるだろう。しかし、それでは万に一つも転生者には勝ち目がない。ある程度成長してしまえば、手加減だって見破られるようになるだろう。

そこで、神の使徒限定の『弱体化ルール』が登場した。そのルールは複数ある。

一つ、全員の『亜流ベルカ式』の使用禁止。

この時点で、彼らは全力の発揮が不可能となった。ライアやアリシアはミッド式に変更している。

二つ、数名の特化能力や稀少技能^{レアスキル}の封印。

既にスペアには幻術特化の特性はなく、ライアやアリスに至っては稀少技能すら残っていない。

三つ、現地住民や転生者への一部の凶悪で殺傷率の高い魔法の使用制限。

スペアはこれで大部分の魔法が使用禁止となった。使おうとしても、その使用方法が思い出せないのだ。

「そうになったら、私に残っているのは身を隠すのと幻影^{シルエツト}だけ。あとは精々クロスレンジ」

「無理ゲーですね」

「でしょ？電気技を封じられたピカ。ユー並みに無力だよ」

「でも、それが実際の幻術使いの限界ですよ。認識阻害なんて狂った次元に到達すること自体がおかしかったのです」

手早く応急処置を終えた瑠奈は、近づいてくる魔力を感じ取った。どうやらフェイトたちが戻ってきたらしい。

「それでは、私は帰ります。家でリリスが待っているのです」

「あ、そっか。リリースって今そっちの家に居るんだよね。元気にしてる？」

「人形のふりをして私のベッドで過ごしてます。時々アウトフレームを展開して散歩に出かけているみたいです」

散り散りになっている彼らだが、それでも互いの心配はしていない。こっぴどい『仕事』は初めてではないからだ。

「あ、そうそう。アリシア、大好きな母親と会えて嬉しいのはわかりますが、公私はしっかり分けてくださいね？もし、プライベートに天秤が傾きすぎたら、その時は――」

――私はあなたを殺さなければなりません。

帰り際、瑠奈はそう言い残して去っていった。

＋　　＋　　＋

「なぜ！貴様は昨日来なかった！」

アスカが学校に登校するや否や、廊下で会った蔵人が掴みかかって

きた。どうやら、昨日の発動の時に来なかったことを言っているらしい。

「だから、昨日も言っただろ。あの白いのに襲われたんだよ」

「それがどうした！さっさと倒して、こっちに来れば良かっただろ！」

蔵人のそれは、まるで子供の駄々であった。無理難題である。

「お前、そんなの無理に決まってるだろうが。アイツ、かなり強かったんだぞ？それに、アイツだって転生者かもしれねえんだ。慎重に対処するべきなのはわかるだろ？」

「そんな言い訳が通用するとも思っているのか？いや、そもそも君は本当に彼女と戦ったのか？」

「はあ？」

「そうか、わかったぞ！君は逃げたんだ！僕が華麗にジュエルシールドを封印するところを見るのに嫉妬して逃げ出したんだ！」

「……何言ってるんのお前？」

ユーノから聞いた話だと、暴走して爆発したジュエルシールドは蔵人が封印したのと言う。しかも、何を考えているのか、それをフェイトに譲ってしまったらしい。

「本来ならば、君が封印するはずだったんだ。受け取ってくれ」

とか言っていたのだとか。

本人はフェイトに好印象を持たれたいがためにした行為なのだろう。そのおかげで、フェイトは原作と違い怪我をしていない。

しかし、それが実に愚かな行為だと彼は気づいているのだろうか？何のためにレイジングハートは破損したのか、わかったものではない。

「君がいれば、レイジングハートが壊れることはなかった。あれは君の責任だ！そのせいで、なのははショックを受けて元気がなかったんだぞ！」

「いや、近くにいたくせに何もしなかった奴に言われたくないんだが」

「何だとお！！」

「それに、あのデバイスには自動修復機能があつただろ？なら今日明日には直るんだから良いじゃねえかよ」

「お前！」

蔵人はついに腕を振り上げ、アスカに殴りかかる。

「こら！何をしているの！」

しかし、運良くそこに担任の教師が現れ、蔵人は取り押さえられた。そのまま職員室へと連行されていく。むろん、アスカも一緒に連れて行かれたのだが。

十　　十　　十

「朝から職員室とは、青春してますね」

「してねえよ」

昼休み、アスカと瑠奈はいつもの場所で昼食をしていた。話題は、もちろん朝の騒動である。

「結局、何が原因なのですか？」

「……まあ、色々あってな」

話を曖昧にするアスカだったが、瑠奈は追求しない。アスカにとって、瑠奈は最高の聞き手だった。

「何にせよ、仲直りはさせられたのでしょう？ だったら、後は放っておけば何とかありますよ」

「そうだな」

「どうせあのパツキンが難癖つけてきたのでしょうし、気にする必要はありません」

教室はその話題で持ちきりで、他の生徒は大体が一方的にアスカが悪いと言う中、瑠奈だけはそう言わない。

転校してきたばかりで、更に言うなら瑠奈以外とは付き合いの良くないアスカ。社交的で生徒の人気もある蔵人。どちらが悪く見られるのかは明白である。

「はあ、裁判だったら即効でストレート負けだっただろうな」

「大丈夫、その時は私が弁護してあげますから」

「……そりゃ安心だ」

＋　　＋　　＋

【君は来なくて良い】

夕方、ジュエルシードの発動を感じたアスカは、蔵人からの念話に耳を疑った。

【はぁ？なんでだよ？】

【君なんかがいなくても、僕となのはで充分に対処できる。むしろ、仲間のことを考えずに逃げ出すような奴がいては足手まといだ】

——何言ってんだコイツ？

それがアスカがまず思ったことだった。どうやら朝の件を未だに引き摺っているらしい。いや、根に持っているといったところだろうか。

【高町も納得してんのか？】

【当然さ。だから、無関係な一般人はさっさと家に帰りたまえ】

実際は、蔵人が勝手に言っていることなのであるが、そんなことはアスカが知るはずもない。それきり、蔵人は念話を断ってしまった。

「何考えてんだか」

二人でできると言うならば止めはしない。むしろ、アスカからすれば厄介事が減って大助かりだった。

「あの白フェイトが出てきたら厳しいだろうが……まあ、何とかなるだろ」

＋　＋　＋

蔵人の宣言通り、ジュエルシードは比較的速やかに封印された。蔵人、なのは、フェイトの三人が砲撃を放ち、押し潰されるかのように暴走体が消滅する。

そして、宙に浮かび上がったジュエルシード。それを見て、蔵人はクロノが現れるのを待った。

幸いにも、今日はスペアは来ていない。この前のように油断が原因で負けることもない。

——よし！良いぞ！ここでクロノを倒して、リンディを論破すれば、なのはは僕にメロメロだ！

予定としては、フェイトに攻撃しようとしたらそれを蔵人が守り、そのままクロノを圧倒して倒す。攻撃の理由は、怪しい黒服からフェイトを守るためといった理由にするつもりだった。

そして、二人がデバイスを振りかぶり、激突した。

瞬間、転送魔法でクロノが現れる。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！
時空管理局、クロノⅡハラウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおう！」

バルディッシュをデバイス——S2Uで、レイジングハートを素手で止める少年。
クロノⅡハラウン執務官だった。

——キタキタキタアアアアア！！

思わずブレイブハートを握る手に力が入る。既に邪魔な転生者は排除した。つまり、ここからは蔵人のための舞台。

——僕が！オリ主だあああああ！！

上空から降り注ぐ魔力弾。ジュエルシールドを奪おうと手を伸ばすフエイト。それを妨害しようと魔力弾を放つクロノ。

「フエイト、危ない！！」

それをシールドで防ぐ蔵人。

「君！そこを退くんだ！」

「うるさい！君こそ何なんだ！突然現れて、何様のつもりだ！」

「なッ！？」

驚くクロノに気を良くした蔵人は、そのまま反撃に転じる。お返し

とばかりに魔力弾を発射し、クロノを追い払った。

「フェイト、今のうちに逃げるんだ！」

「え、え？」

フェイトからすれば、なぜ自分が助けられているのかわからない。悪いのは確実に自分であり、更に言うなら、敵である蔵人が自分を守ったのだ。理解不能であった。

【フェイト！早く撤退するよ！】

その声にハツとしたフェイトは、急いでジュエルシードをデバイスに格納し、アルフ共々転送魔法で去っていく。

「ッ！待つんだ！」

「行かせない！」

クロノが追おうとするが、またしても蔵人が邪魔をする。

「クロード！彼は敵じゃない！時空管理局は——」

「うるさい！」

『Saber Form』

ユーノの言葉を見殺し、蔵人はクロノに襲い掛かる。

クロノからすれば、こんな素人丸出しの弱小魔導師くらい簡単に制圧できるが、無駄に戦闘をせずに停止させたい。よって、一時的に

防戦一方になっていた。

しかし、蔵人はそんなことは関係ない。防御魔法しか使わないクロノを見て取り、自分が優勢であると錯覚した。ここでクロノを倒す。それしか頭になかった。

「食らえ！」

無駄に魔力だけは込めた魔力刃を振り上げ、クロノが張った防御魔法に渾身の力で叩きつける。

「クツ！待て！話を聞くんだ！」

「うおおあああああ！！！」

クロノの静止を振り切り、蔵人は更に魔力を込める。そして、防御魔法に限界が訪れ、ピシリと罫が入った時だった。

「はい、アウト。公務執行妨害で制圧するから」

スパーク音と共に、凄まじい衝撃が蔵人を叩き潰す。

「ぐああ！」

「動かないで。これ以上抵抗したら本当に逮捕するわよ？」

ブレイブハートは蹴り飛ばされ、既に手が届かない。手足は茜色のバインドで拘束され、身動き一つできなかった。うつ伏せの状態で完全に拘束された蔵人は、声の主を見ることがすらできない。

「く、クロードくん!？」

「これは彼が悪いのよ? 待てと言ったのに聞かないんだから」

なのはの心配する声が聞こえたが、声の主が一蹴する。

「落ち着いた? 大人しくするなら開放しても良いわよ?」

その言葉に、蔵人は渋々頷く。するとバインドが解除された。

「くっ、いったい何だ!」

立ち上がった蔵人が振り返ると、表情が固まった。目の前の少女に目を奪われたのだ。

プラチナブロンドの髪はポニーテールになっており、風にサラサラと波打った。紫苑のキツイ眼差しは気の強さを感じさせる鋭さがある。しかし、最も目を引くのは、異常になまでに重装甲なバリアジヤケットと巨大なデバイスだった。

漆黒の鎧は、原作で見たどの騎士よりも厚く、重そうに見える。その手に持つ黒斧の柄の大長さに至っては、2メートルを超えていた。それに見合うだけの巨大な刃は、殺人的なまでに攻撃的なフォルムをしている。装甲と斧、二つの重さを合計したら、いったいどれだけになるのか想像できない。

「それで、事情を聞かせてもらえるってことで良いのね?」

「え、あ、はい」

呆然とする蔵人と会話することを早々に諦めた少女は、その横にいるなのはに問いかけた。それに、なのはがたどたどしく返事をする。

『二人とも、お疲れ様』

すると、空中にモニターが開き、翡翠の髪的女性が顔を出した。次元航行艦『アースラ』艦長のリンディ＝ハラオウンである。

「すみません、片方は逃がしてしまいました」

『うーん、まあ、大丈夫よ。でね、ちょっと話を聞きたいから、そつちの子たちをアースラに案内してくれないかしら？』

「了解です。すぐに戻ります」

モニターが閉じ、少女とクロノが振り返る。

「それじゃあ、あなたたち三人にはご同行を願うんだけど」

「は、はあ」

「わかりました。ほら、クロード」

「……え、あ、ああ。わかったよ」

そして、転送の準備を始めるクロノ。

「あ、あの」

その時、なのはがおずおずと手を上げた。

「ん？何だい？」

「あの、あなたの名前……」

その視線は、黒斧の少女に向いていた。

「私？ああ、まだ名乗ってなかったわね」

肩に担いだ斧を地面に突き立て、少女は名乗った。

「時空管理局、執務官補佐のアイデア＝グレイスよ。よろしく」

第十二話

「……どうしてこうなった」

アスカは現在、アースラの茶室にいた。例の似非ジャパンである。

自宅で宿題をしていたアスカは、なのはからの突然の連絡で発動の現場に呼び出されたのだ。多少は怪しんだものの、言われた通りに向かったアスカは、そのままクロノたちに連れられて転送、あれよあれよという間にここに来ていたのだった。

「ごめんね。この人たちが、アスカくんにも話を聞きたいからって……」

「……そういうことか。お前たちはもう聞いたのか？」

「まだだよ」

つまり、これから原作での会話が始まるらしい。アスカは憂鬱になった。来る途中でユーノに聞いた話だと、また蔵人は馬鹿な真似をしていたらしい。おまけに、そのまま取り押さえられたのだとか。

その後、既に変身を解いたユーノを含めた四人での事情聴取が始まった。といっても、原作通りのかなり軽いものだったが。

「これより、ロストログア『ジュエルシード』の回収については、時空管理局が全権を持ちます」

「えっ」

「君たちは、今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って、元通りに暮らすと良い」

驚くのはとユーノだが、原作を知る蔵人と、ある程度の予想をしていたアスカは驚かない。

「で、でも、そんな……」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人が介入するレベルの話じゃない」

「そういうこと。餅は餅屋ってことだから、手出しも口出しも無用よ」

「でも……！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩、ゆっくり考えて、四人で話し合って、それから改めてお話をしましょう」

「待ってください。それはおかしくありませんか？」

リンディの言葉に、蔵人が待ったをかけた。アスカの予想通りである。

きつと、蔵人はここでリンディの言葉の裏を読み取って良い格好をするつもりなのだろう。

「なぜ、僕たちに話し合う猶予などを与えるのですか？ 邪魔ならば一言、介入するまで終わりで良いはず。まさかとは思いますが、僕たちを引き入れるつもりですか？」

「なに！」

「クロノ、落ち着いて」

その言葉にクロノがいきり立つが、アイデアがそれを諫めた。

「鷲ノ宮くんだったかしら？あなたは何が言いたいのか？」

「つまるところ、あなたたちは僕たちを必要ないと言いながらも、結局は利用するつもりなんでしょう？違いますか？何せ、AAAの魔導師が二人もいるんです。戦力としては充分に使える」

蔵人の言ったことは、アスカも薄々は思っていたことである。本当に介入させたくないなら、話し合いなどさせる必要はない。蔵人の言葉になのはとユーノが慌てる中、アスカは黙って状況を見守った。

「……そう聞こえてしまったなら、謝罪しま——」

「なに調子に乗ってるのか？」

重い沈黙の中、リンディが謝罪の言葉を言おうとした。しかし、それをアイデアが遮る。

「馬鹿じゃないのか？自分たちが必要だと思ってるのか、どれだけ自分に自信があるのよ」

皆が啞然とする中、凍えるような目でアイデアは淡々と話す。腹立た

しいと、不快だと目が語っていた。

「良い？あなたたちは確かに使えるわ。AAA魔導師が二人に、優秀な結界魔導師が一人、それと場慣れしてるのも一人ってね」

「アイデア」

「黙っててクロノ」

今度はクロノがアイデアを諫めるが、それをアイデアは一蹴した。リンディは何も言わずに、状況を静観してる。

今言っていた場慣れしている者とは、おそらくアスカのことだ。なのはから名前を聞いた後、すぐに調べたのだろう。いや、この世界の事件という時点で先に調べていたのかもしれない。

アイデアはなのは、蔵人、ユーノ、アスカの順に見回し、鼻で笑う。

「はつきり言うわ。あなたたち四人分の働きくらい、私一人で充分にできる。スクライアくとイクシオンくんはできれば欲しいところだけど、残りの二人は論外。魔導師経験が一ヶ月の素人なんか、いるだけ足手まといよ」

「なんだと!？」

「それとも何？鷺ノ宮くんはプロの魔導師よりも、自分が役に立つとも思ってるわけ？自信過剰も大概にしておきなさい」

「それじゃあ、どうしてリンディさんはあんなことを言ったんだ!」

苦し紛れと言わんばかりの反撃をする。しかし、それすらもアイデア

は予想していたかのように答える。

「頭ごなしに関わるのを禁止しても、無理やり戻ってくるかもしれないからよ。『この事件は僕たちが解決しようとしていたんだ』とか言われて突然来られたら迷惑でしょ？ここで全部答えを出してくれると助かるのよ」

そうすれば、とアイデアは付け加えた。

「勝手に事件に関わった時点で、公務執行妨害であなたたちを堂々とぶっ飛ばせるわ」

ペロリと唇を舐めるその仕草は、むしろそうなることを望んでいるようだった。

＋　　＋　　＋

「……すまないな」

転送ポートまで送ってくれたクロノは、転送前に謝罪をしてきた。

「彼女——アイデアにも、悪気があるわけじゃないんだ。ただ、何かが起こってからでは遅い。君たちを危険な目に遭わせないために、あえてあんな風に言ったんだよ」

『……はい』

クロノの言葉に、全員が頷く。実際、アイデアが言っていたことは正論だ。

彼女が何者なのかはわからないが、悪い人物ではないのだろう。時

には厳しく言わないと通じないことだってあるのだ。

言われた当人は全く反省していないようだったが。

「とにかく、慎重に話し合って答えを出してくれ。中途半端な気持ちで関わると、痛い目を見るかもしれないからね。ああ、それとイクシオン」

最後にクロノに呼び止められた。話にくいことなのか、なのはたちと距離をとってから小声で話し出す。

「わかつていると思うが、君は保護観察中だ。下手に関わるのは得策じゃない」

「……わかつています」

「だが、覚悟を持って関わるといふのなら、僕たちは全力で君に協力する。囑託魔導師として解決に尽力すれば、保護観察の期間も短くなるだろう」

「……ありがとうございます」

それを最後に聞いて、アス力たちは地球へと戻ったのだった。

＋　　＋　　＋

「あつちやゝ、そりゃ酷い」

夜、帰ってきたフェイトから今日あったことをスペアは聞いていた。どうやらとうとう時空管理局が来て、おまけに執務官まで出てきた

らしい。

「それで、これからどうするのん？」

「もう駄目だよ！時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ。逃げようよ、三人でどっかにさ」

その選択は、スぺアにとっては愚策でしかない。母親の役に立つこともできず、延命すらもできないで死ぬだけだ。それならば、玉碎覚悟で戦った方がスぺアにとってはマシだった。

原作と違い、フェイトはそこまでの虐待を受けていない。スぺアがのりくらりとプレシアと会わせるのを回避しているからだ。その分、親子での関係は原作以上に疎遠になったとも言える。フェイトのプレシアへの依存は変わらないが。

そして、スぺア自身もプレシアからは嫌われている。フェイトの二号機として造ったアリシアモデルのクローンであるにも関わらず、記憶しか再現できなかった、まさにフェイトとは真逆の存在。すぐに死んでしまうアリシアなど、プレシアが認めるはずがなかった。『記憶を消去された二号機』は、改竄された記憶によってフェイトの双子の姉となった。

——つまり、実際は私は妹なのだ。

なぜプレシアが姉として設定したのかはわからないが、スぺアは特に気にしなかった。

既に、スぺアは『生前のアリシア』の記憶がかなり薄れている。前世の記憶がなければ、とっくに忘れていただろう。

「でも、逃げた後はどうするの？結局、一生逃亡生活なんだよ？」

「それは……………でも、相手は一流の魔導師だ！本気で捜査されたら、ここだっていつまでバレずにいられるか……………」

「…………でも、私、母さんの願いを叶えてあげたいの。母さんのためだけじゃなくて、きっと自分のため」

フェイトの言葉に、スピアは目を細めた。その言葉の中に、本当は自分などは全く入っていないと気づいているからである。

「…………はあ、マザコンもここまで来れば天晴れだね」

スピアは、フェイトの頭をグリグリと撫でた。乱暴な撫で方に、『アリシア』と同じ金色の髪がクシャクシャと乱れる。

「ね、姉さん…………！？」

「おけおけ、わかったよ。これから全部が終わるまで、昼間には私も出る」

その言葉に、フェイトとアルフは驚愕する。それは、一歩間違えれば——バリアジャケットが壊れれば文字通り死の危険があるのだ。それをスピアはやると言った。相当の覚悟が必要なはずのことを簡単に言っただけなのだ。

「駄目だよ姉さん！」

「そつだよ！そこまでしなくても——」

「そこまでしなくちゃ、本当に捕まるよ？母さんのために頑張るんでしょ？だったら、お姉ちゃんも頑張るしかないじゃ〜ん」

二人は押し黙った。確かに、今は猫の手でも借りたいのだ。人手が増えるのはありがたい。しかし、心配なものは心配だった。

「……約束して姉さん。戦闘はしないで、探索だけかしないうて」

「なんでさッ！？私の方がフェイトよりも強いよ！」

「馬鹿なことやってんじゃないよ！もし戦闘になったら、ひ弱なアンタじゃ一撃で墜とされるだろ！」

「当たらなければどうということはないッ！」

その後、フェイトとアルフの必死の説得により、戦闘行動はしないという約束をさせられたスペアであった。

＋　＋　＋

「うゝ、私ってそんなに信用できないかな〜？」

疲れて眠ってしまったフェイトの頬を突付きながらスペアは脹れていた。ハムスターのように頬を膨らませている。

その時、ふと気配を感じたスペアは一瞬でデバイスを展開。背後にいる何者かに背を向けたまま鎌を突き立てた。アルフは今コンビ二に出かけているし、こんなに気配を薄くしたりはしない。

「誰？三秒で答えないと殺すよ？」

「……あなたも甘くなつたわね」

久しぶりに聞いたその声に、スぺアは力を抜いた。
デバイスを解除し、その人物に向き直る。

「アイデア！久しぶり〜」

そこにいたのはアイデアだった。

アスカたちが会った時とは違い、その口には煙管キセルを銜えている。

「脅かさないですよ。危うく殺すところだったよ〜」

「嘔吐きなさい。殺気がなかったわよ？前のあなただったら問答無用で殺していたでしょ？」

アイデアが煙を吐きながら問いかける。

「ふふふ、妹の教育に悪いからですよね〜？」

それに答えたのは、スぺアではない第三者だった。部屋の暗がりから現れたのは、先日と同じように不法侵入した瑠奈である。

「あらルナ、久しぶり。変わらないわね、あなたは」

「そうですか？自分ではかなり変わったつもりですよ？例えば、正月に振袖を着せられても気にならなくなりました〜」

「……そう、なんか悪かったわね」

気まずそうにするアイデアが再び煙を吐くと、紫煙は風もないというのに開かれた窓から出て行った。

「それで？アリスはかなり具合が悪そうだけど、大丈夫なの？」

「だいじょーぶ、無印が終わるまでは。その後は知ーらない」

「あつそ。ならいつそのこと、無印の間に葬ってあげる？」

「うわーお、正義の管理局員様がそんなことを言ってよろしいのですかー？」

「大丈夫よ。流れ弾が何かに当たって弾かれて、それが当たって死ぬだけなもの。偶然って怖いわよね」

「この世に偶然なんてない！あるのは必然だけなのだー！」

「じゃあ、あなたは死ぬべくして死ぬのよ」

これほど騒がしいというのにフェイトが目を覚まさないのは、アイデアがフェイトの周囲にだけ防音結界を張っているからである。

「それで、真面目な話どうなの？あなたはA・Sに参加するの？するんだったら相当厳しいわよ？リンカーコアなんて死にかけなんですよ？」

「そうだよー。だからさ、ここからは本当に運に任せてみようと思うんだー」

「生きるか死ぬかは神のみぞ知るってわけね。あんな神になんて任せたら碌なことにならなさそうだけど」

「良いではないですか」。邪神に祈るのだって乙なものですよ」

その時だった。玄関の扉が開き、アルフが帰ってくる。

「ただいま。夕食買ってきたよ」

「あ、お疲れ」。シーチキンマヨネーズのおにぎり買ってきた？」

アルフが帰ってきた時、既に家にはスぺアと眠ったフェイトしかいなかった。他に人がいた気配すら残っていない。アイデアが撒き散らしていた煙の匂いさえも。

第十三話

「……どうしたもんかな」

『何がでしょうか、マスター』

家に帰されたアスカは悩んでいた。

ここはスッパリと魔法と縁を切る絶好のタイミングである。それに、放っておいても事件が解決することはわかっているのだ。ここで無理に関わる必要はないはずなのである。

だが、

——この世界には原作との差異がありすぎる。

それがアスカの判断を鈍らせているのだった。存在しないはずのフエイトの姉、存在しないはずの執務官補佐。何よりも、アスカ自身と蔵人が原作にはない差異なのだ。一概に原作通りに進むという楽観論を述べることは、アスカにはできなかった。

蔵人は「ヒロインが増えた」くらいにしか思っていないのだから。

「……ここはあれだ」

アスカは携帯電話を手に取り、親以上に電話をしている親友を呼び出す。普段は2コールで出るその親友は、今日は珍しく待たせてから電話に出た。

『はい、どうかしましたか？』

「瑠奈、少し聞きたいことがあるんだ」

こういう困った時は、瑠奈に聞けば大抵良い案を出してくれる。

「あのさ、人生相談なんだが。面倒事に関わりたくはない、でもその結果が悪い方向に転ぶのも嫌な時ってどうすれば良いと思う？率直な意見を聞かせてくれ」

『……はあ、面倒事ですか。そうですね。厳しく言うなら、気になるなら自分で解決しろ！って感じですね。待っていたって良いことはありませんよ？結果が悪かったら後悔するだけです』

「……わかった。サンキュ」

『いえいえ』

上手く誘導されたとは知らないアスカは、こうして原作介入を決意したのだった。

＋　　＋　　＋

「……最低ね、あなた」

「いきなり何ですか？」

とあるビルの屋上、そこには二人の魔導師がいた。その気になれば、一時間でこの街の住民を皆殺しにできるほどの強者である。その片方は管理局員だというだから、魔法とは恐ろしいものである。

「あなた、今迄そうやってイクシオンくんを誘導してきたの？」

「Yes」それが私の『仕事』です」

放っておいてもアス力は原作に首を突っ込むことになるのだろうが、自分から原作に介入してくれるのなら是非もない。瑠奈は、アス力が道を間違えずに『主人公』をやってくればそれで良い。

「はあ、わからないわね。あなたが教授を慕っているはわかってるけど、そこまですることなの？私からすれば育ての親って感じなんだけど」

「まあ、そうでしょうか。私は少し狂っているのかもしれない。でも、それで良いですよ」

携帯電話を置んだ瑠奈は苦笑した。

「私は教授を裏切らない。私は、死んで魂が消滅しても最後まであの人の剣です。例えば私以外のメンバーが全員裏切っても、ね？そのために私は生まれてきた、だからこそ、私は最強で忠実であり続けなければならぬのです」

珍しく間延びしないで淡々と話す『ルナ』は、アイデアにはその外見以上に人形めいて見えた。使命に縛られた道具。剣は人を斬るために生まれてくる。それを体現したかのような存在。

きっとルナは、最期まで教授のために戦うのだらう。四肢が？がれ、武器を失くし、首一つになっても。

「ふう、やっぱりあなたは人間離れしているわ」

「お褒めいただき光栄です」

煙管を吸うアイデアが嘆息すると、ルナは『瑠奈』に戻った。まるで、何もなかったかのように。

「では、私はもう帰ります。アイデアはこの世界にいて大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ。名目上では現地への偵察と、ジュエルシードの探索の特別任務中だから。艦長とクロノは本部に報告中。正式な任務変更は明日になるわ」

「あ、ということは、海上戦はもうすぐですね」

「そうよ。イクシオンくんにもできれば参加してもらいたいわ」

「大丈夫でしょう。なんせ、彼は『主人公』ですから」

「鷺ノ宮くんは？」

「……なぜかCL。NN。Dの春。さんを思い出しました」

十　十　十

『ジュエルシード、シリアル?! 封印!』

モニターに映るなのは、巨大な鳥の暴走体を封印する。

「うーん、なかなか優秀だわ。このままウチに欲しいくらいかも」

リンディの言葉にアスカは頷いた。確かに、なのはは魔導師としては破格の才能を持っている。恵まれた魔力量に、魔力の操作技能。それらを一ヶ月で使いこなすなど、現役の魔導師が膝を突くレベルだ。

「鷲ノ宮くんもそこそこね。まだ近接戦闘での間合いの取り方が下手だけど……まあ、一ヶ月ならこんなものよ」

一方、蔵人の実力もなかなかだ。アイデアは敢えて辛口で評価しているが、それでも充分に優秀な部類だ。

現在、アスカたちとフェイトたちのジュエルシードの奪い合いは膠着状態と言えた。こちらは三つ、向こうは二つと、お互いに数はそう変わらない。

——これは、いよいよか……。

海上での決戦が近い。アスカはそう睨んだ。

自分が覚えている数少ない原作だ。利用しない手はない。当日は自分も出て、ジュエルシードを原作以上に回収するのがアスカの思惑だった。

十　十　十

そして、アスカたちがアースラと行動し始めてから十日目。ついに事件が始まった。

割り当てられた部屋で一人、デバイスのチェックをしていたアスカは、警報が鳴るを引き締めた。
アラーム

—— 始まった……！

アスカが急いでブリッジに駆けつけると、モニターには暴走したジユエルシードに翻弄されるフェイトとアルフの姿があった。スペアの姿は見えない。

アスカに少し遅れてやってきたのはたちはモニターの映像を見て
啞然とする。

「あ、あの！私急いでに現場に——」

「その必要はないわ」

なのはの言葉を、アイデアがスッパリと両断する。

「放っておけばあの子は自滅するもの」

「そんな……！？」

「仮に自滅しなければ、力を使い果たしたところで叩けば良いの。
何なら、私たちがあの子に攻撃するというのも有りよ」

「おいおい……」

原作で言うはずだったクロノの言葉をアイデアが言ったことにも驚いたが、その内容の悪辣さにアスカは思わず顔を引きつらせる。

「アイデア、そこまでだ。今のうちに捕獲の準備を」

本来ならば悪役に徹するはずのクロノが仲裁に入ること、場の空気は何とか保たれた。

「私たちは、常に最善の選択をしなきゃいけないわ。残酷に見えるかもしれないけれど、これが現実」

「でも……」

内容そのものは悪辣極まりないが、アイデアが言ったことは間違っていない。わざわざ危険な手を使う必要はない。

その時である。転送のゲートが突然開き、蔵人となのはがそれに駆け込んだ。

「君はッ！」

「待ちなさい！」

逸早く気づいたアイデアがユーノに駆け寄り、転送をやめさせようとする。

——俺に誘いはなしだよ。

嘆息しながら、アスカはユーノの前に立ち塞がった。

「お前は！」

「アスカくん!？」

「アスカ！？どうして！？」

三人が驚く中、アスカは苦笑する。

「行くんだろ？それくらいはお見通しだ。今度は俺も誘え」

「……邪魔する気？」

立ち塞がるアスカに、最後の確認と言わんばかりの目つきで問いかけるアイデア。だが、アスカはその程度では怯まない。

「悪いな、殺気とかは最近で慣れたんだよ！ユーノ！」

「——ッ！あの子の結界内へ、転送！！」

そのままなのはと蔵人は結界内へ転送されていった。

「……あなたはもう少し賢い人だと思っていたわ、イクシオンくん」

「そうか？俺はアンタらが思っている以上に馬鹿なんだぜ！」

「うわっ！？」

そのままユーノと肩を組んだアスカは、そのまま転送ポートへと二人で跳び退る。

「あなた！」

「行くぞユーノ！転送しろッ！」

「ああ、もう！無茶苦茶だよアスカは！」

笑いながらそう言うユーノと共に、アスカたちも結界内へと転送されたのだった。

第十四話

その後は原作通り、否、原作以上の火力と人数による、ジュエルシードの封印となった。

なのはとフェイトはもちろん、アスカと蔵人の二人が加わったことにより、原作以上にスムーズに封印は終了。
そして、

「友達に、なりたいんだ」

なのはの心からの言葉に、フェイトは答えることができなかった。
誰もがなのはとフェイトを見守る中、それは訪れる。

雷鳴が轟き、紫電が海原を揺るがす。

「か、母さん……！？」

一番早く動いたのは、以外にも蔵人だった。

原作知識によりプレシアからの次元跳躍魔法を予め知っていた蔵人は、この瞬間を待ち望んでいたのだ。

「フェイト、危な——ぶげらっ！？」

「はい邪魔——！！」

しかしフェイトを助けたのは蔵人ではなく、幻術で姿を隠して状況を見守っていたスピアだった。

どさくさに紛れてフェイトに抱きつこうとしていた蔵人を石突で殴り飛ばし、

「でえりやああああああ!!」

上空からの落雷を切り裂いた。

「姉さん!? 離れていてっ——」

「説明は後だよ! アルフ!」

「——ッ!」

スピアの言葉にハッとしたアルフは、ジュエルシードを掴み取ろうと飛翔した。

しかし、転送で割り込んだクロノがそれを阻む。

「邪魔あ! するなあ!!」

——押し負けるッ!

そう直感したクロノは、ジュエルシードを掴み取ろうと手を伸ばした。だが、それを見逃さないスピアが、アルフに先んじてクロノを海に叩き落とす。

「ジュエルシード、封印!」

『Sealing』

そのまま全てのジュエルシードを格納し、スピアが安堵の息を吐いた。

それに焦ったのはアスカである。原作ではここでクロノが三つのジユエルシードを奪うはずだった。それなのに全てのジユエルシードが奪われてしまった。自分が居たというのに原作よりも状況が悪化してしまった。

アスカは歯噛みし、せめてスピアだけでも捕まえようとした時だった。

「目標を達成した瞬間こそが、最も人間が油断する瞬間なのよ」

『Lightning Road』

スパーク音をBGMに、瞬間移動じみた速さで現れたイデアがスピアに剛斧を叩きつけた。しかもシールドを足元に張ることで衝撃を逃がせないようにして、文字通りスピアを叩き潰す。

「ガッは!？」

「姉さんッ!!」

バリアジャケットでも吸収しきれない衝撃がスピアの内臓を傷つけ、それが吐血という形で表れる。

そんなことはお構いなしと言わんばかりの手際でイデアはスピアをバインドで拘束した。アルフがスピアを助け出そうとすると、イデアは動けないスピアの首に斧を突きつける。

「お前……!!」

「抵抗したらこの子の首を刎ねるわ。それでも良いなら……」
「かかってきなさい、ワンちゃん」

その管理局員とは思えない手口に、フェイトとアルフだけでなくアスルヤなのはたちも驚愕する。

逆に、イデアは余裕の笑みで足元の近代ベルカ式のシールドに転がるスピアを踏みつけた。

そして、

「やれるもんなら！」

スピアも必勝の笑みを浮かべた。

「やってみる！」

『Shield Break』

足場であるシールドが破壊され、イデアはバランスを崩した。それを見逃さずスピアはバインドを破壊し、逆にイデアをバインドで拘束する。

「アルフ、転送して！」

「あいよー!!」

息も絶え絶えな様子のスピアの肩をフェイトが抱え、アルフは転送魔法を発動する。

「逃がすわけないでしょ！」

しかしアイデアもバインドを速攻で破壊し、その剛斧をアルフに――

「やめてよ!」

――叩きつけようとした瞬間、なのはがアルフを庇うように前に出た。両手を広げ、通せんぼをするようにアイデアの前に立ち塞がる。流石に味方であるのはを攻撃するのは躊躇われたのか、一瞬アイデアが斧を止めた。

その隙にフェイトたちは転送魔法で逃走するのだった。

十　　十　　十

「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動が、あなたたちだけでなく周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ、それはわかりますね?」

『……はい』

リンディの言葉は全て正論だった。そのせいでアースラが攻撃されたということは事実なのだ。

「本来は厳罰に処すところなのですが……結果として、いくつか得るところがありました。よって今回のことについては、不問とします」

アスカたちは顔を見合わせた。命令違反をした上、ジュエルシードを全て奪われ、あまつさえ逃走を許してしまったのだ。良くても捜査から外されるということくらいは覚悟していた。

「でも、あなたたちが命令違反したことは変わらないの。こういうことはもうやめてよね」

「そういう君はどうなんだ！君の攻撃は明らかにあの子を殺そうとしていただろう！人質だってそうだ！」

イデアの苦言に蔵人がいきり立った。確かに、アスカから見てもスピアへの攻撃はやり過ぎに映った。攻撃するのは良いにしても、血を吐くまで攻撃するのは駄目だろう。それに管理局員が人質をとるような行為も印象が悪い。

蔵人の反論に、イデアは肩を竦めた。

「あれは見た目ほどの威力ではないわ。あなたやイクシオンくんレベルのバリアジャケットなら昏倒するくらいで済む。それは――」

『それは私が保証します』

突然の声にアスカは辺りを見回した。

『マスター、ここからの説明は私めが』

「OK、任せるわ」

声の発生源はイデアが制服から取り出した黒いカードからだった。どうやらあの剛斧の待機形態らしい。

『マスターの力加減は完璧でした。あれほどのダメージが彼女に入ったのは、バリアジャケットの防護機能がまともに働いていなかったのが原因ではないかと』

「つまり、彼女——スピアさんのバリアジャケットは装甲が薄いということかしら？」

『薄いを越え、見た目だけの張りぼてといったところですよ。あれでは機能していないも同然かと』

リンディの質問にも淡々と答えるそれは、なるほどアイデアのデバイスらしいといえらしい。

「人質にしてもそうよ。あれは無用な戦闘行為を止めるためだった。人質をとれば事件が止められるというのなら、私は何人でも人質をとるわ」

「……グレイス執務官補佐。確かにあなたの行為は合理的でしたが、今後はそういう行為は控えるようにしてください」

「了解しました、艦長」

素直に了解の意を伝えたアイデアは、話は終わったとばかりに黙り込んだ。

「……さて、問題はこれからね。クロノ、事件の大元について何か心当たりが？」

「はい。エイミィ、モニターに」

『はいはい』

モニターに映し出されたのは、黒髪で長身の女性だった。目つきは

鋭く、猛禽を思わせる。

「あら……！」

「そう、僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師『プレシア』テスト
ロツサ」

コイツが！とアスカは手を握り締める。彼女が余計なことをしなければ、自分はこんな日常に巻き込まれずに済んだ。そう思うと、アスカにはプレシアを憎むことを止められなかった。

＋　　＋　　＋

「良くやったわ、フェイト」

「……はい」

原作とは違い全てのジュエルシードを奪取したフェイトは、プレシアから鞭を受けずに済んでいた。しかし、傍に控えるアルフ共々その表情は晴れない。

先程の事件が原因でスぺアは数箇所の骨折、リンカーコアの重大な損傷、さらに内臓はズタズタだった。スぺアは現在、時の庭園にある自室で眠っている。

もはや、いつ死んでもおかしくない。実質、危篤状態であった。あの一撃でここまでのダメージを受けるはずがない。スぺアは、ずっと前から身体のことを隠していたのだ。

「……あ、あの、姉さんは……姉さんは、助かるんですか？」

「ええ、大丈夫よフェイト。母さんに任せておけば、きっとスペアは元気になるわ。だから、残りのジュエルシードを奪ってきて」

「……はい、母さん」

フェイトには、もはや母親を信じるという手立て以外に残されていなかった。

プレシアと別れたフェイトとアルフは、そのままスペアが眠る部屋に向かった。そこでは呼吸器などの機械に囲まれ、身体中が包帯まみれのスペアが眠っている。トレードマークの眼帯もはずされていた。目を覚ます様子は……ない。

「姉さん、ごめんね……。私のせいで」

「フェイトのせいじゃないよ！アタシのせいだ……！アタシがもつとちゃんとしていれば……！！」

頭に浮かぶのは、三角形の魔方陣を展開したあの黒い斧の女。

「アイツ、絶対に許さない！今度会ったらただじゃおかないよ！」

「……やめて、おいたほうが良いよ……？」

アルフの言葉に、眠っていたスペアが答えた。薄っすらと目を開き、ほとんど唇を動かさずに話している。

「姉さん！」

「スペア、アンタ大丈夫なのかい！？」

「な……んとか」

普段の色白の肌が、ここに来てさらに白くなっている。呼吸も浅く、呂律も回っていないかった。明らかに大丈夫ではない。

「ジュエルシードは、どうなったの？」

「大丈夫だよ。六個とも回収した。母さんも褒めてくれてたよ」

「そっか……」

スピアには既に普段の快活さはどこにもなく、話すことも辛そうだ。実際、スピアは話すことにさえ相当の体力を使っていた。腕を動かすことすらできない。

「フェイト、無理しないでね……？何かあったら呼んで。すぐに助けにいくから」

「なに言ってるんだい！そんな身体で何ができるって言うんだよ！」

「そうだよ！ジュエルシードは私とアルフに任せて、姉さんはゆっくり休んで」

「……うん」

弱りきったスピアを見て、フェイトとアルフは決意したのだった。絶対にジュエルシードを持ち帰ってみせると。
アルフは管理局に投降するという流れはなくなった。

こうして、物語は原作を外れていく。

第十五話

「あっちゃ、これは参りましたね」

全ての情報をアイデアから受け取った瑠奈は嘆息した。アルフがなのはたちと合流しなければ、テストロッサ陣営の情報が管理局に流れない。

『どうするの？別にこのままでもなのはとフェイトの決闘はあるとは思っけど……』

「确实とは言えませんが」

瑠奈からすればこの程度はどうしても修復できる。しかし、それは姿を隠さなければだ。

最悪、放っておいてもほぼ問題ない。原作通りに物語は進むだろう。ほぼ確実に。

「……………これは、裏切り者が必要ですね」

＋　　＋　　＋

『……………しあ、アリシア』

「ん、うう」

聞きなれた声で、スぺアは目が覚めた。これは部屋に隠してある通信機からだろう。

「……ルナ？」

『Yes』大丈夫ですか？アイデアにこつ酷くやられたみたいですけど？』

「もう、駄目……かも」

『うわ、あなたが弱音を吐くとは相当にヤバイですね』

言われるまでもなく、スピアの身体はボロボロだった。今までは騙し騙しやってきたが、もうそれもできそうにない。

『まあ、そんなことはどうでも良くて』

しかし、瑠奈は非情だった。仲間の状態など気にもしない。瑠奈にとって、死というものは身体が使えなくなるだけのこと——通過儀礼に過ぎないからだ。

『あなたのおかげで、アルフが管理局に協力するというイベントが消え去ったのですよ。というわけで責任とれやゴラアってわけですよ』

「……どうすれば、良いの？」

『管理局に投降してください。それで、あなたがアルフの代わりに自供を——』

「……できないよ」

『……はい？』

キツパリと言ったスぺア。瑠奈は理解できないという様子だ。

『何かできない理由でもあるのですか？監視されているとか』

「う、ううん、そうじゃ、ないよ。ただ、母さんや、フェイトたちを裏切るなんて、できないよ……」

『はあ？すみません、頭大丈夫ですか？この世界はあなたが生まれた世界の平行世界ですよ？あれはあなたの母ではありませんし、フェイトⅡテストロッサはただの出来損ないです』

「でも、母さん、は、母さんだし、フェイトは、フェイトだよ。私の大事な——」

『プライベートに傾きすぎたら』殺す』って言いましたよね？』

底冷えするような瑠奈の声がスぺアを黙らせた。これは本気だ。そして、瑠奈の最終警告であるとスぺアは悟った。

『アリシア、あなたは弱っているからそんな世迷言を言ったのでしょう？ほら、今なら聞かなかったことにしますから、ちゃんと言ってください。』私は投降する』と』

「……私は、母さんたちを裏切らないよ」

『あつそ』

ブツツと通信が途切れた。

これで晴れてスぺアは瑠奈の敵となったのだろつ。もう殺されても文句を言えない。

「そう、私は母さんを裏切らないよ。絶対に。そうだよね？ロキ」

枕元に置いてある宝石がチカチカと瞬いた。

＋　　＋　　＋

ここ数日、蔵人は違和感を感じていた。いくら待ってもアルフがアリスに保護されないのだ。

アースラから一時的に下船している間にアルフが救助されないと、事情聴取ができないではないか。

どうやら、もう一人の転生者の男は状況をわかっていないらしい。

本人から聞くとところによると、原作知識を部分的にしか覚えていないのだとか。つまり、この状況が危険だと理解しているのは自分だけなのだ。

何とかしなければと思いながら既に三日が過ぎた。このままでは原作が変わり、フェイトとなのはの決闘がなくなってしまうかもしれない。それだけは何としても避けなければ。

「――クロードくん？」

「ッ！ああ、何でもないよ、何だいなのは？」

蔵人はなのはの言葉にハツとした。考え事に夢中で話を聞いていなかった。

下校中、家の方向が同じ蔵人となのはは良く一緒に帰る。そして、ここ最近の帰りは自然とフェイトの話題になるのだった。

「フェイトちゃん、今頃どうしているかな？ ジュエルシードは全部見つかったし……もう、会えないのかな？」

「そ、そんなことはないさ。大丈夫だよ」

むしろ、そうでなくては困る。このまま無印が終了しては、フェイトを自分のハーレムに入れることができないではないか。なのはは既に自分の手中、後はフェイトだけなのだ。

——このままでは、計画が……！！

その時だった。

【君たち、聞こえる？】

「ッ、フェイト!?!」

「フェイトちゃん、どこ!」

フェイトからの突然の念話に、蔵人となのはは驚愕する。周囲を見回すが、フェイトの姿は見当たらない。

【明日の午前5時、執務官が現れた公園で待ってる。そこで、最後の勝負をしよう】

それは挑戦だった。

【私はそこで、全てのジュエルシードを賭ける。だから、君も持っている全てのジュエルシードを賭けて】

それは、フェイトからなのはへの決戦の誘いだった。

相当に切羽詰っているのだろう。全てのジュエルシードを賭けるなど、普通に考えれば受けるはずがない。『普通』ならば。

「わかったよ、フェイトちゃん。一対一の真剣勝負！絶対に負けないから！」

返事は返ってこなかった。それでも、その言葉は彼女に届いているとなのはは確信していた。

一方、蔵人は意外な状況の好転に笑いを堪えるのに精一杯だった。何がどうしてこのような展開になったのかは知らないが、やはり世界は自分に都合良く回っている。

——クククツ、やっぱりそうだ。イクシオンなんかじゃない。僕が、オリ主だ！

なのはが横にいなければ、今頃蔵人は高笑いしていたらう。それほどに愉快でたまらなかった。まるで世界が自分の手中にあるように。

＋
＋
＋

「はあ、本当に世界の修正力って怖いわ」

なのはから連絡を受けたアイデアは嘆息した。瑠奈が頭を悩ませてい

る間に、勝手に解決してしまったのだ。もはや笑うしかない。

「アイデア、何か言ったか？」

「別に？そんなことよりも、こっちからすれば好都合って感じじゃない？」

「そうだねえ。探すのは手間取りそうだったし、向こうから来てくれるならば大歓迎だよ」

エイミイの言う通り、向こうから来てくれるならばアースラには渡りに船だった。場所も指定してきている以上、罨や待ち伏せだって仕掛け放題。おまけに、使い魔か主人のどちらかを泳がせれば拠点まで掴める。

「ノーリスクハイリターン。この機会を逃す手はない」

「そうね。わざわざ決闘なんてさせる必要はないわ。高町さんを罨にして武装隊で総攻撃しましょう」

「……相変わらずあくどいね」

エイミイが思い出すのは、彼女がアイデアと訓練校で初めて会った時のことだ。作戦立案の授業で優等生だったアイデアは、周囲の輦蹙を良く買っていた。挑発的な態度に加え、その美貌も僻みの対象だったのだろう。

当然、どこの世界にもそういう人物は嫌がらせの対象になる。初めは周囲から無視されるという軽いものだったそれは徐々にエスカレートし、次第に私物を隠されるようになっていった。しかし、それ

も長くは続かない。

なんと、アイデアに嫌がらせをしていた訓練生が次々と怪我で退校していったのだ。

その後、訓練校内では噂が流れ始めた。

『アイデアはグレイスに逆らったから消された』と。

信じずに嫌がらせを続ける者もいたが、後にでる怪我人ほど規模が大きい。それに震え上がる訓練生を見て、アイデアは笑いながら言ったのだ。

「あら、偶然って怖いわね。気をつけた方が良いわ。次はあなたたちの番かもよ？」

それ以来、嫌がらせはピタリと止まった。そして怪我人が出るのも止まったのだ。こうしてアイデアは訓練校で伝説の存在となった。『女帝』という名は、現在の訓練校でも通じるほどだ。

——でも、実際に怪我した人って数人だけなんだよねえ。

後にアイデアに興味を持って話しかけたエイミィは、アイデアから衝撃の真実を聞いたのだ。

「私は誰にも手を出していないわ。ただ噂を流しただけよ」

「ええ！？でも、アイデアちゃんに酷いことしていた人ばかり——

——」

「あのねえ、私はそこそこの成績をキープしているの、作戦立案の

講義以外は。そんな私を僻む輩が優秀なわけないでしょ？自爆よ自爆」

アイデアが言うには、最初の一人は本当に勝手に怪我をして退校しただけらしい。後の連中には、アイデアが直接プレッシャーをかけたのだという。怪我の危険がある訓練の度にアイデアは念話で脅していたらしい。

「射撃魔法の制御訓練だったら『あなたのこと、間違つて撃つちゃうかも』って何回か言つて、近くに何発か当てれば良いの。後は勝手に怪我をするわ」

「じゃ、じゃあなんで後になるほど大怪我の人がでるの？」

「後期の訓練の方がハイレベルだからに決まつてるでしょ。実際、室内系の訓練生に怪我人はいないわ」

「そ、そういえば……」

つまり、アイデアは全く手をくだしていないのだ。アイデア以上に悪知恵が回る人物をエイミィは知らない。

……まあ、知らないだけで上はいるのだが。眼鏡の最高神とか。

結局、このからくりを見破れたのはアイデアと同年のクロノだけだった。

クロノがアイデアを執務官補佐にしているのも、作戦立案能力を認めただからというのが大きい。

アイデアも訓練校で起こした怪事件を見抜いたクロノを高く評価している。こうして、アイデア、クロノ、エイミィのトリオが完成したの

だった。

「ふふふ、アイデアちゃん！頼りにしてますよっ！」

「何よ急に？まあ、頼って後で泣きを見ないようにね」

「ふん、大丈夫さ。僕の執務官補佐は優秀だからな」

それを聞き、顔を赤らめてそっぽを向くアイデアを見て、エイミィは今回の作戦が上手くいくと理由もなく感じた。

「だが、決闘はやらせる」

「……？なんでよ」

「彼女にはフェイトⅡテストロッサを削ってもらふ。あの使い魔も向こうが一对一と言っている以上、手出しはしてこないだろう。念のため、ユーノを近くに配置するが」

「なるほどね」

アイデアは納得した様子だが、エイミィには全くわからない。思わず首を傾げた。

「なんでわざわざ戦わせるの？困んだ方が良いじゃん」

「……あのねえ、そこにこの前の次元跳躍魔法を撃ち込まれたらどうするのよ？それを辿って座標を特定できても、向かわせる戦力がないでしょう？」

「なのはが勝てば、ジュエルシードが手に入る。万が一また次元跳躍魔法を受けても、座標を出して武装隊を向かわせられる」

「逆にテストロッサさんが勝っても、魔力を削られてフラフラな彼女を叩けば良い。逃げられても追跡できるわ」

それは隙のない完璧な作戦だった。

それでいて、なのはたちの士気を挫くこともない。彼女は全力で戦えるだろう。

「勝ってくれるのに越したことはないが、負けても損はない」

「そういうこと。つまり、ここで聞いたことは他言無用ね。アリシア」テストロッサのこと……伏せておきなさい」

「……了解」

こうして、なのはたちが知らないところでも着々と準備が進んでいくのだった。

第十六話

なのはとフェイトが決闘をすると聞き、アスカはついに来た、と内心身構えていた。正直、前に見たなのはとフェイトの実力差では勝負にならないと思っではいる。しかし、そこを圧倒的な成長で何とかしてしまうのが主人公なのだろう。最悪、蔵人たちもいる。

問題は姉のスペアの方だ。あれほどの大怪我をしてまともに戦えるとは思えないが、彼女の幻術ならば何をされても気づかない可能性もある。

用心するに越したことはない。

そして翌日、アスカ指定場所の公園にいた。

向かう途中でなのはや蔵人たちとも合流し、クロノたちとも連絡をとった。準備は万端、後は待つだけだ。

「……ここなら、良いよね。出てきて、フェイトちゃん」

ざわっと木々が揺れる音と共に、アスカは近づく気配を感じ取った。振り返ると、街灯の上に立つフェイト、その足元に立つアルフがいた。対するなのはも、無言で戦闘態勢を整える。バリアジャケットとデバイスを展開し、静かにフェイトを見上げた。

蔵人とユーノが息を呑み、アルフが大地を踏みしめ、アスカが目を見詰めた。

「私たちの全ては、まだ始まってすらいらない。だから、本当の自分を始めるために」

空気が張り詰め、風が止み、木々が静まる。

「始めよう、最初で最後の本気の勝負！」

十　　十　　十

二人が飛び上がり、海上へと場所を移した。目にも留まらぬ速さで動くフェイトに対し、なのはは誘導弾の弾幕で応戦する。高速機動の近距離型と、火力重視の遠距離型。全く違うスタイル同士の戦いに、蔵人とユーノは目が離せない。

一方、アスカもその戦いの凄まじさに驚愕しつつも、周囲に気を配ることを忘れない。いつスペアが襲撃してくるかわからないのだ。最初に現れない時点で、アスカは不意打ちを警戒していた。

「なあ、あのスペアって奴はどうしたんだよ？」

「……スペアなら、今はベッドの上さ。アンタらんトコの斧使いの女のせいだね……」

アルフは意外にも答えてはくれたが、それでも信用半分といったところだ。しかし、アルフの様子から怪我をしているのは確実なようだ。アスカは判断した。

ともかく、今はなのはとフェイトだろう。自分の戦闘スタイルは二人の戦い——特になのはを参考にしたものだ。見ておいて損はないだろう。

この頃のなのはは、基本的に砲撃をそこまで重視していない。誘導弾を連発し、攻撃されれば圧倒的なバリア出力で防ぎ、余裕があれ

ば近接戦で仕留めるといったところだ。

——叩き上げて感じたな。戦い方がかなり歪だ。

アスカの感想通り、なのはの魔法はかなり偏りがある。良く言えば生粋の砲撃魔導師の原石、悪く言えば才能に頼り切った弾幕馬鹿だ。砲撃型である以上、誘導弾の操作は必要不可欠ではあるが、相手の接近を許しすぎだ。これでは張り付かれたら最後、そのままズルズルと削られていくだろう。騎士などが相手ならばまず勝てない。

一方フェイトはなかなかバランスが良い。遠距離攻撃のバリエーションもあるし、接近戦にしても一撃離脱を繰り返すためその速度を生かせている。何より、魔法の展開が速い。これは長年の努力による賜物だろう。

結論を言うと、お互いに相性が悪い。装甲が薄いフェイトには砲撃型のなのはは最悪だし、重装甲のなのはには高速移動するフェイトに追いつく術がない。つまり、重い一撃が入った方が負ける。クリーンヒット

その時、フェイトが動きを止めた。そして、莫大な魔力を放出する。

——大技が来る……！

それに気づかないのではない。しかし、距離を離す前にバインドに捕らえられてしまった。金色のバインドがなのはの手足を固定し、大量の魔力スフィアがフェイトを囲むように展開される。

『Phalanx Shift』

「アルカス、クルタス、エイギアス。疾風なりし天神、今導きのも

と撃ちかけ。バルエル、ザルエル、ブラウゼル」

スフィアが紫電を振りまき、魔力量が一斉に増した。

「フォトンランサー、ファランクスシフト！」

——これが、フェイトの必殺魔法……！！

「打ち砕け、ファイアツ！！」

それは電撃の嵐だった。スフィアから雨霞と電撃が放たれ、なのはに襲い掛かる。まさに掛け値なしの大魔法。この歳でこれほどの魔法を使える魔導師が、次元世界に何人いるだろうか？直撃の寸前になのはが防御魔法を展開するのが見えたが、焼け石に水だろう。

それだけに止まらず、フェイトは徐に右手を上げ、止めの一撃と言わんばかりにファランクスシフトの残りのスフィアを束ねた。

「スパーク——」

フェイトの右手に集まった魔力は、それだけで一撃必殺を誇る雷槍となり、

「——エンドッ！！」

なのはを挟み取った。

直撃したそれは破壊の嵐を球状に撒き散らした。巻き込まれた海水が一瞬で蒸発し、大気が悲鳴を上げる。

——これは死んだだろ……っ！

アスカにそう思わせるには十分な威力だった。こんな大威力の魔法を、魔導師歴一ヶ月の素人に防げるはずがない。それはアースラに
いる人間を含めた全ての人間の総意だった。

「なのはッー！」

「なのは！返事をするんだッー！」

これには原作を知る蔵人さえ焦った。最後のあの魔法は、原作では
ディバインバスターと撃ち合うはずだったのだ。あれでは劇場版の
再現ではないか。それに、実際の戦闘を見ていたのも大きい。あんな
殺人的な威力の魔法を、魔導師とはいえ小学三年生が生き残れる
はずがない。少なくとも蔵人には自分がそれをできとは思えな
かった。

「ったあ。撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

しかし、なのはは耐え切った。バリアジャケットは傷ついてはいて
も、特に怪我をしているようには見えない。アスカだけでない。全
ての人間が今度こそ驚愕した。人間技ではない。才能だけでは説明
できないほどの、もはや『怪異』だ。

「今度はこっちの——」

『Divine』

「——番だよー！」

『Buster』

そして砲撃。あれほどの大魔法を防ぎ切っておきながら、まだこれほどの魔力を残しているとは誰も思っまい。それはフェイトも同様だった。予想外の一撃に、消耗していたフェイトは回避することができなかった。反射的に防御魔法を展開し、

——直撃……ッ！

真正面から受け止めた。そこには、フェイトの意地があつたのだろう。なのはに自分の必殺魔法を防ぎ切れて、自分が防げないはずがないと。

集中しろ。バリアの面積は最小限に。密度を上げる。耐え切れ。そう自分を鼓舞して、フェイトはとうとう砲撃を防ぎ切った。既にバリアジャケットはボロボロになり、息も切れている。

そこに、桜色の光が降り注いだ。

「受けてみて、デイベインバスターのバリエーション！」

『Star Light Breaker』

空気中の魔力がなのはのもとに集まり、一つの巨大な魔力へと変貌する。魔力操作の上位技能、砲撃魔法の奥義がそこにはあった。

「収束、砲撃……」

あれは駄目だ。フェイトは直感的にそう悟った。あれは防ぎ切れない。防御の上からでも落とされる。

そして、その考えは正しい。この場にいる誰にも、あの魔法は防ぎ切れないだろう。そう、アスカにすら無理だろう。

回避行動を取ろうとするフェイトだったが、それは許されなかった。先程、自分がやった事の再現、遠距離からのバインドによる拘束により、既に逃げ場はなかった。

「これが私の、全力全開!!」

その一瞬で覚悟を決めたフェイトは、既に回避を諦めていた。残りの魔力を総動員し、防御魔法を組み上げる。持てる力の全てを使い、三重にシールドを張った。

「スターライト——」

——来いッ!!!

「ブレイカー!!!」

桜色の爆流がフェイトのシールドに食いついた。魔力同士が衝突し、この世界ではあり得ない異音を奏でる。しかしそれも長くは続かず、三重のシールドが、食い破られる。

海に落ちたそれは小型隕石の落下のように海面を捲り上げ、海水を押し退けた。

十 十 十

「な、なんつー馬鹿魔力……!!」

「ふえ、フェイトちゃん生きてるかなあ!?!」

「エイミイ、念のために墓を用意しておいて。場所は任せるわ」

『縁起でもないこと言うな!』

アースラから状況を監視していたクロノたちも、なのはの魔法には驚きを禁じえなかった。

圧倒的な火力、圧倒的なバリア出力、そして勝負強さ。それを見て、クロノは薄ら寒いものを感じたのだった。

クロノがモニターを再び見ると、なのはが海中からフェイトを救出したところだった。そして、フェイトは大人しく回収した12個のジュエルシードを取り出した。

「よし、なのは。ジュエルシードを確保してそれから彼女を――」

「いや、来たッ!」

「――ッ!?」

「エイミイ! 逃がしたら許さないわよ!」

「了解!」

それは、予測した通りのタイミングだった。なのはたちの上空の空が突然陰り、暗雲が渦を巻きだしたのだ。そして落ちる雷。

「ビンゴ! 尻尾掴んだ!」

「よし！不用意な物質転送が命取りだ！座標を！」

「もう割り出して送ってるよ！」

待機していた武装局員が一斉に転送され、時の庭園へと移動する。
全て計画通りだった。

＋
＋
＋

時の庭園の玉座にて、プレシア・テストアロツサは猛烈な勢いで血を吐いていた。次元跳躍魔法に加え、座標を特定されるのを覚悟で物質転送を行ったのだ。身体は深刻なダメージを受けていた。

「……次元魔法ももう身体がもたないわ。それに、今でこの場所も捉まれた」

もはや絶体絶命の窮地だった。管理局が押し入ってくるのも時間の問題だろう。

「フエイト、あの子じゃ駄目だわ……！」

もうあの出来損ないは必要ない。

それに、出来損ないはもう一つある。それを使えば、時間稼ぎくらいはできるだろう。

「……そろそろ、潮時かもね」

＋
＋
＋

武装局員が玉座の間に突入し、その奥に踏み込んだ時、『それはあつた。』

生体ポッドの中に眠るフェイトそっくりの少女。

『もう良いわ。終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形どもを娘扱いするのも』

プレシアの言葉を聞いた全員が息を呑んだ。

『聞いていて？あなたのことよ、フェイト。せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない、私のお人形』

「……最初の事故の時にね、プレシアは実の娘——アリシア——ステタロッサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究が、使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成」

『ッ！？』

その言葉に全員がハツとした。記憶が薄れていたアスカも、それで全てを思い出す。

「そして死者蘇生の秘術——フェイトって名前は、当時、彼女の研究に付けられた開発コードなの」

『……良く調べたわね。そうよ、その通り。だけど駄目ね、ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮、作り物。失ったものの代わりにはならない』

『アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ』

『アリシアは時々わがままも言ったけど、私の言うことをとても良く聞いてくれた』

『アリシアは、いつでも私に優しくかった』

その一言一言が、フェイトの胸に突き刺さる。

『フェイト、あなたはやっぱりアリシアの贗作よ。にせものせっかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃ駄目だった』

「やめて！やめてよッ！」

なのはの制止の声を無視し、プレシアは話し続ける。
全員が、その狂気を帯びたプレシアの言葉に割り込めずにいた。

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使ったためのお人形。だからあなたはもう要らないわ』

『どこへなりと、消えなさいッ！！』

なのはが何か言ったが、それはアスカの耳に入らなかった。

——人は、こんなに狂うことができるのか……！？

アスカが施設にいた頃、そこにいた連中は子供も大人も大なり小なり狂っていた。しかし、ここまでの狂気を感じたことなどない。感情のふり幅を突っ切った。それが目の前の女なのだろう。

『ふっふふ、良いこと教えてあげるわ、フェイト。あなたを造り出してからずっとね、私はあなたが——』

『大嫌いだったのよッ！！』

＋　　＋　　＋

「……来たね」

庭園内に多数の転送魔法の気配を感じ取ったスピアは、ここ数日で何とか動けるレベルには回復した身体で起き上がった。未だに身体はフラつくし、頭はガンガンと痛い。身体を起こすだけで吐き気がする上に、内臓はキリキリと締め付けられるようだった。

『スピア、起きているかしら？』

すると空中に半透明なモニターが浮き上がり、プレシアが通信を繋げてきた。

「起きてるよ。大丈夫」

『そう。なら、これから来る侵入者を追い出してちょうだい。身体

が痛むかもしれないけど、ベッドの横に置いてある薬を使えば大丈夫よ」

スペアが確認すると、そこには確かに注射器が置いてあった。どうやら、これを注入しろということらしい。

「これは？」

「気付け薬みたいなものよ。これが終われば必要なものは全部揃う。だから頑張って母さんの期待に応えてね？」

「……はい」

通信を終え、スペアは注射器の中身を検めた。

「ふふふ、これが終われば、か。これ母さんの研究室で見たことあるよ。一時的に痛覚を麻痺させて、使用者を興奮させる薬だった。その分、副作用が酷かったよ確か。この匂いは良く覚えてる」

「では、プレシア女史はあなたを……」

「みたいだね、っと」

「マスター！？」

躊躇いもせず、スペアは薬を腕に注入した。薬は完全に体内に注入され、思考にノイズがかかったかのようにハッキリしなくなる。今まで悩まされてきた頭痛や吐き気も止まった。今なら何でもできそうな気がする。

『……マスター』

「行くよ、ロキ。ここが私の最後の見せ場」

漆黒の大鎌を展開し、バリアジャケットを展開する。眼帯を取り付けて深呼吸。

「ルナに見せてあげる！『スペアⅡテストロッサ』の生き様をつけて！」

第十七話

時の庭園に踏み込んだアスカたちを待ち受けていたのは、大量の傀儡兵だった。しかも、アスカがいた施設にも傀儡兵は配備されていたが、そこにあったものよりもいくつか世代が後のものもいる。

「いっぱい、いるね……」

「まだ入り口だ。中にはもつというよ」

「クロノくん、イデアちゃんこの子たちって……」

傀儡兵を見たなのはが不安そうに問いかける。人間が中にいれば、傷つけてしまうという彼女らしい心配だ。

「近くの敵を攻撃するだけの、ただの機械だよ」

「所詮は鉄屑、遠慮なくぶっ壊して良いわ」

「……そっか、なら安心だ」

「ふっ、機械ごときじゃ相手にもならないさ」

蔵人は余裕の笑みを見せ、なのはと共に突撃しようとする。それを、クロノとイデアが止めた。

「この程度の敵に、無駄弾は必要ないよ」

「手本を見せるから、そこで良く見ておきなさい」

「え？」

徐にクロノは杖を掲げた。杖の先に魔力が集中し、水色の魔力光が煌く。一方、イデアは両手で斧の柄を握り締め、近代ベル力式の魔方陣を足元に展開し、紫電を周囲に撒き散らす。

『Stinger Snipe』

『Lightning Road』

『はぁッ！！』

次の瞬間、クロノの魔力弾が数体の傀儡兵を貫いた。それだけに止まらず、上空で残りの魔力を圧縮し、再び撃ちかかる。イデアも負けていない。スパーク音と共にイデアの姿が消えると、刹那の間にその直線状にいた傀儡兵が一瞬で爆散した。

『……………ッ！！』

二人の強さは圧倒的であった。片や、技術を極めた一流魔導師。片や、破壊力と速度を極めた一流騎士。

——これが、管理局の魔導師^{フロ}かッ！

アスカにはどちらも真似できない技だ。才能だけでなく、厳しく長い修練の先にある次元である。

「呆けていないで行くわよ！」

『Lightning Road』

再びアイデアが消え、正面の門が一撃で破壊される。残るのは、彼女が移動したと思われる経路で爆ぜる雷のみだ。

「ふん、雑魚ばっかね。カートリッジを使うまでもないわ」

「君が異常なんだよ」

「言っじゃないの！」

冗談を交わしながら先頭に行く二人に続き、アスカたちも突入した。

「お前ら、気をつける。その黒い穴は虚数空間だ。落ちたら最後、魔法を一切キャンセルされるぞ」

「え？」

「つまり、飛行魔法も使えなくなるってことだよ！重力の底まで真つ逆さまだ！」

「き、気をつける……！」

「大丈夫さ。落ちそうになったら僕が助けるよ」

アスカの注意に、ユーノが補足を入れた。それを聞き、なのはは顔を青褪める。蔵人にフオーされて調子を取り戻したが。

『Lightning Road』

「邪魔よ」

進路上にある障害物はアイデアが全て破壊し、六人はとうとう分岐点に着く。しかし、そこにも傀儡兵が今までにない程に大量に待ち伏せしていた。今までに見なかった飛行型も見受けられる。

「ここから二手に別れる！君たちは、最上階にある駆動炉の封印を！」

「クロノくんたちは？」

「プレシアの所に行く！それが僕らの仕事だからね」

「高町さんのエスコートは任せたわよ、男子三人！自信がないなら代わってあげても良いけど？」

ニヤリと笑うアイデアに、男三人は笑い返した。

「任せてください！」

「ふっ、何なら君のエスコートもしてあげようか？」

「っは！そりゃあ責任重大だ！」

それぞれの役割を確認した一同は、各々のデバイスを構えた。

「今、道を作る！」

『Blaze Cannon』

クロノが砲撃を放ち、数体の傀儡兵が吹き飛んだ。その隙に、アスカたちは上へと上る階段へ。

「クロノくん、アイデアちゃん！気をつけてね！」

なのはの激励にクロノは心配するなとばかりに笑いかけ、アイデアは軽く手を振った。こういう場に慣れているのだろ。二人の顔は落ち着き払っている。

「クロノ、どっちが多く倒せるか競争しましょ」

「良いだろう。負けた方は食事を奢るっていうやつだな？」

「私が勝ったら今度パフェ奢りなさい」

「僕が勝ったらステーキを奢れ」

そして、二人は山のようにいる傀儡兵に踊りかかった。

＋
＋
＋

爆音が庭園を揺るがす中、スペアは一人歩いていた。その足取りは確かなものだが、刻一刻とタイムリミットが迫っていることを彼女は正しく理解していた。向かう先は、駆動炉へと続くエレベーター。おそらくそこにアスカたちがいるとスペアは睨んでいた。

【フェイト、聞こえる？】

【姉さん……！？】

スピアの念話に、フェイトが驚きの声を上げた。自分の容態を心配して慌てふためくフェイトの様子が目に浮かぶ。

【今どこにいるの？】

【……これから、母さんの所に向かうんだ。そこで大事な話をする】
フェイトの言葉から既にアスカたちと別れていると知ったスピアは、最短距離で『目的地』に着くように道を変更した。

【大事な話って？】

【……それは……今は言えない。でも、後で絶対に話すから。だから姉さんは部屋でじっとしてて。終わったら迎えに行くよ】

【はいはい、りょうかい】

そこで念話を断ち切ったスピアは気配を消しつつ、それでいて全速力で移動する。ここから先は臨戦態勢でないと命が危ないと知っているからだ。

——庭園の揺れは収まっていない。つまり、駆動炉の封印はまだなはず。

自分の『獲物』は、まだそこにいる。スピアはそう確信し、笑みを深めた。フェイトですら見たことがない邪悪な笑みに。瑠奈がいれば言っただろう。

今度は何の悪巧みをしているのか、と。

十　　十　　十

「おお、やってますね」

アスカたちが奮闘する駆動炉を眼下に見下ろしながら、瑠奈は感嘆の声を上げた。まだまだ技術は拙いものの、才能を感じさせる動きを見せる転生者二人。後衛になのは、中衛にアスカ、前衛に蔵人、それぞれのサポートにユーノ、とバランスの良い陣形で戦っている。

瑠奈がいるのは、駆動炉のある空間の上階——非常口付近にあるスペースだった。階段と踊り場しかないものの、見物をするにはちょうど良い。見つかりにくいが全体を一望することができる絶好の場所だった。庭園の構造に詳しい者でなければ、この場所は知らないだろう。

「うん、これは厳しいんじゃないですか？あの四人を相手にしたら、弱体化したアリシアでは勝率低めです」

「元々、殺傷能力が高めな方でしたからね。『弱体化ルール』が最も深刻なレベルになるのも必然だったでしょう」

ルナたち神の使徒の中でもこの制限が緩いのは、イデアとキャロ、そしてルナの妹分二人だ。この四人は元々技巧派の魔導師や騎士なため、禁止されるような魔法はほぼなく、また危険な稀少技能レアスキルもない。

「私は……うん、ちょっと禁止されてますよね」

『ああ、非殺傷不可能魔法ですね。致死性の効果しか出せない魔法なのです、禁止されて当然かと』

瑠奈がアルテミスと話している間に、駆動炉の傀儡兵は全滅していた。そして、そのままなのは封印魔法で駆動炉の動きを止める。それと同時に庭園の震動が収まった。

『どうやら四人が移動するようです』

「ですね。では、気づかれないように距離をとって……………あれ？」

瑠奈の感じたそれは、小さな違和感だった。首元に針を刺されたような、それでいて全身を満遍なく舐めるように見られているような……………。

「——アルテミスッ!!」

『Panzergeist』

首に漆黒の刃が突き刺さった。

見覚えのある漆黒の刃は、瑠奈が咄嗟に張り巡らせたフィールド防御に阻まれ瑠奈の白磁の肌に届くことは叶わない。思考すら置き去りにして、瑠奈はその場を飛び退いた。すると、『二本目』の刃が瑠奈がいた地面を粉碎する。砕け散った階段を見下ろしながら、空中に止まった瑠奈は状況を理解した。

「……これはどういふつもりですか？アリシア」

そこにいたのは、二本の鎌を構えたスピアだった。右手の鎌を肩に担ぎ、左手の鎌を地面に下ろしたそれは構えというには独特すぎるが、自然体とするには隙がなさすぎた。

「ルナ、私がもうすぐ死ぬのは知ってるよね？」

「知ってます。それがどうかしたのですか？」

「私、母さんたちともっと一緒にいたいんだ。でもこのままじゃ駄目なわけ。フェイトも悪い子じゃないし、アルフは弄ると面白い。それに、きつと母さんは転生者たちが助けてくれるしね！駄目だったとしても、フェイトを残すなんて可哀想でしょ？だからさ、思っただよ」

音もなく空中に踏み出したスピア——否、アリシアは、抑えきれないとばかりに笑った。

「健康で強い身体が欲しいな。って」

瑠奈は冷や汗が背中に流れるのを感じた。

「は、はあ？だから、どうしたのですか？」

「知ってた？『弱体化ルール』にはね、裏ルールがあるんだよ。危険で凶悪な魔法は使用禁止、ただし、『現地の世界の人や転生者』には、ね」

「……………」

「わかる？神の使徒は転生者じゃないよ？」

「……まさか」

「うん、そういうこと」

壮絶な殺気を感じ取った『ルナ』は、デバイスと騎士甲冑を神速のタイムで展開した。間違いなくこの女は、この世界、この瞬間だけは敵だと認識した。

「ルナ、その身体ちょうだいっ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3406z/>

ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

2012年1月8日01時51分発行